

## 平城京と葬地

金子裕之

はじめに

和銅三(七一〇)年三月 都は藤原の地を離れ、新たに営まれた平城の地へ遷った。都城の建設は単に建築学的な面だけでなく、都にふさわしい土地の選定に始まり、都城全域の河川管理や排水計画・整地といった土木工学、交通路網の整備までも含む広汎な総合体系を要した。標題の葬地の設定もその一環であった。

平城京の葬地に関する記録は知られないが『養老喪葬令』には「凡そ皇都及び道路の側近には並に葬り埋めることを得ざれ」とある。これは『日本書紀』大化二年三月の詔「凡そ畿内より諸々の国々に至るまでに、一所に定めて収めしめ、汚穢處々に散じ埋むることを得じ」と理念的に共通するものであろう。こうした禁令の存在からみて、律令国家の手によって平城京周辺に葬地が設定されたとの推測を可能にする。都城周辺の葬地が律令国家によって意識的に設定されたとする、都城と葬地の関係を追求することで、その都城がもつ特質を明らかにできるのではあるまいか。小稿はこうした観点から、まず平城京

の葬地を明らかにしよう。

平城京の葬地については、和田 萃・岸 俊男両氏の優れた考察がある。和田 萃氏は、平城京では『喪葬令』皇都条に規制され、葬地が京外に求められたことを確認。この葬地は従来から知られている三ヶ所―北京極の一条通り以北の奈良山丘陵、外京東の春日野・高円山と京西方の生駒谷―に、新たに外京の五条六坊南側の能登川の氾濫原を加えるべきとされた。岸 俊男氏は、太安萬侶墓の発見に関連して論じた。外京東の丘陵地帯の葬地を和田説など通説とは別に、高円山東の田原里に求める。そして、この地は、平城京を挟んで西の生駒谷の葬地と地理的に対応すると指摘、また、京北の葬地は天皇陵や有力貴族の墓が集中することから、格が高く、これらに比べると東方の葬地は格が下がることを明らかにされた。<sup>(4)</sup>

以上から、平城京の葬地は、京の東・北・西の丘陵地帯にあること、重要であったのは京北の地であること、などが明らかとなった。北方を重視することは、のちの嵯峨天皇の遺詔「山北幽僻不毛地」を折んで葬ることや、墓地は北方勝地を取るべきとした天台座主良源の遺告<sup>(6)</sup>

にも共通した思想である。ただし、この北方は平安京葬地の実態からみて、京（宮）の真北を指すものではなく、莫然と京の北を指すようである。これは、次にみる平城京においても同様である。

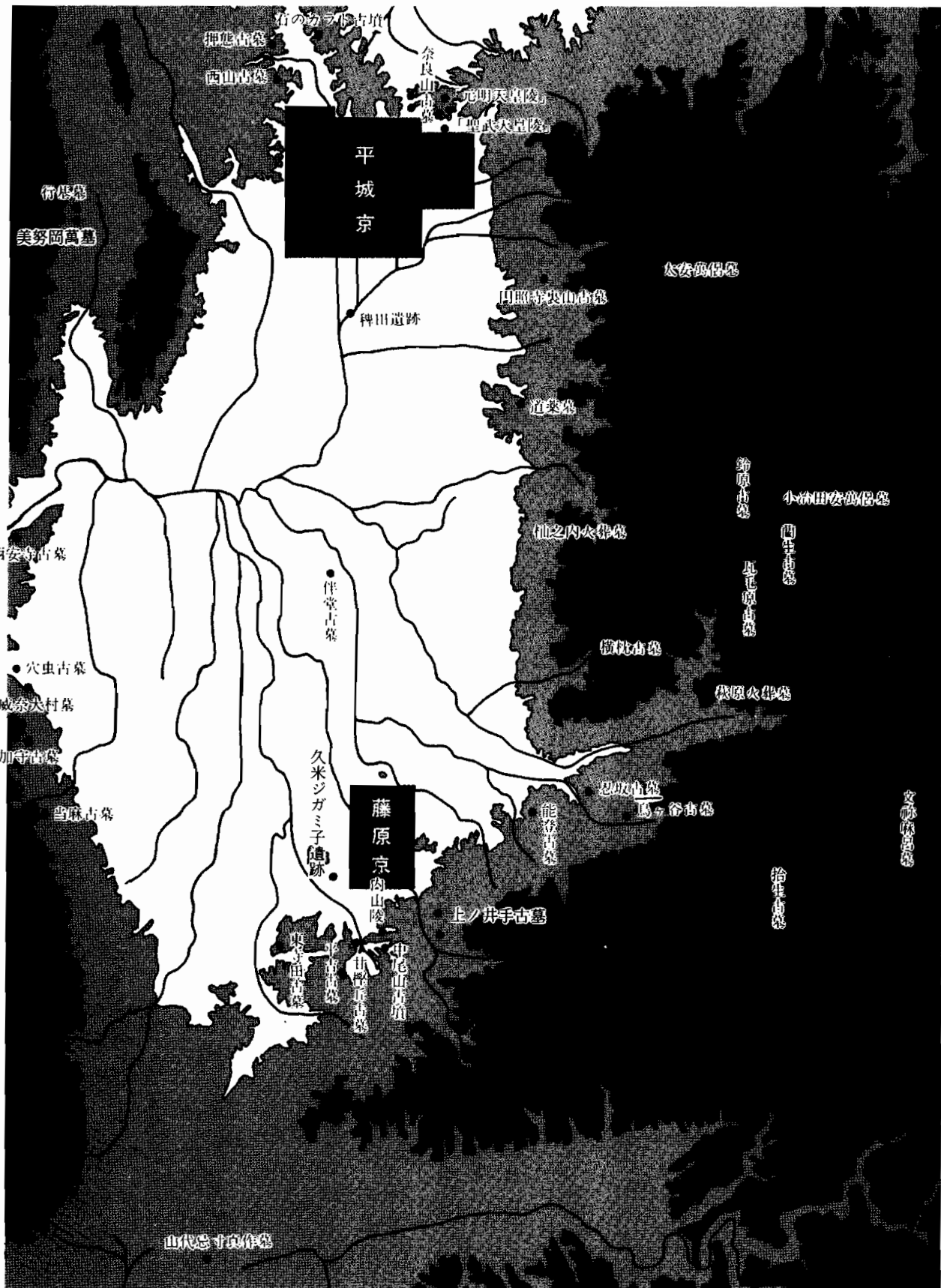
近年の平城京と周辺の発掘調査によって、平城京の葬地には、なおつけ加えるべき余地がある。また、和田萃氏が指摘したように、平城京の葬地は先向する藤原京のあり方とは異なるが、両者の関係については審らかでない。日本都城の葬地の淵源に関しては、和田氏が前掲論文で分析されたが、同氏の主たる関心は倭京・藤原京のそれに限定されており、平城京について触れるところがない。従って、小稿ではこうした先学の業績に導かれつつ、平城京葬地の淵源についても検討を加え、そこから派生した問題点にも触れることにしよう。

## 二 平城京の葬地

### 〔一〕奈良盆地の八世紀墳墓の分布

平城京の葬地を述べるには平城京周辺だけでなく、広く奈良盆地の同時代墳墓の分布にまで目を向ける必要がある。この時代の墳墓は大半が偶然の機会に見えられ、研究者の目に触れぬまま消滅した例も多かったであろう。それでも小島俊治・黒崎直氏等の努力によって今日迄四十四カ所余りが知られる。これをもとに作成したのが第一図である。この図には藤原京の葬地を考える手懸りとして、七世紀代の例

と、いわゆる終末期古墳、さらに平城廃都後の状況を知るために、九世紀代以降の例も図示した。第一図によると八世紀墳墓の分布は、盆地に沿った丘陵周縁及び高原地帯に分布し、地域的に少なくとも九グループに分けられる。地方平野部は発見例が少なく、平城京の南に接した河川敷にも認められる。このなかから、平城京に居住した貴族・官人・庶人の葬地を判別するには、その地理的位置とともに被葬者の性格を考える必要がある。この手懸りが墓誌である。奈良盆地の八世紀墳墓のうち墓誌を伴った例には、文祢麻呂墓・威奈大村墓・道葉墓・山代忌寸真作墓・太安萬侶墓・小治田安萬侶墓・美努岡萬墓・行基墓の八ヶ所があり、第一表に、その発見地・被葬者の死亡年月・経歴・居住地などをまとめた。この表から、平城遷都以前の文祢麻呂・威奈大村墓は藤原京の葬地を示す可能性があり、山代忌寸真作墓は発見地が和歌山県境に近い奈良県五条市で、地理的に離れすぎることから、ともに除外する。残る五例を地域的に整理すると、平城京東方―太安萬侶墓・道葉墓・小治田安萬侶墓、平城京西方―美努岡萬墓・行基墓となる。前者のうち道葉は大柗君一族である。大柗氏は渡来系氏族で、現天理市柗町付近を本拠地と考えられており、佐井寺も三輪町狭井社付近に推定されている。道葉は平城京の葬地とは関係せず、本貴地の近くに埋葬された可能性があり、ここでは疑問としておこう。従って、平城京東方の葬地として太安萬侶墓の田原里周辺と、小治田安萬侶墓のある都祢盆地を考える。西方の葬地については、美努岡萬



第一図 奈良盆地の葬地

人名	発見地	墓誌の年代	官位	備考
文忌寸祢麻呂	奈良県宇陀郡榎原町	慶雲4(707)	正四上	
威奈真人大村	奈良県北葛城郡香芝町	慶雲4(707)	正五下	越城に終れる。大倭国葛木下郡山君里須井山岡に埋葬す
僧道業	奈良県天理市岩屋町	和銅7(714)		
山代忌寸良作	奈良県五条市東阿田	養老6(722)	従六上	河内国石川郡山代郷(の人)
太朝臣安萬侶	奈良県奈良市比叡町	養老7(723)	従四下	左京四条四坊(の人)
小治田朝臣安萬侶	奈良県山辺郡都祁村	神亀6(729)	従四下	右京三条二坊(の人) 大倭国山辺郡都家御郡里岡の安墓
美努連岡萬	奈良県生駒市萩原	天平2(730)	従五下	
僧行基	奈良県生駒市有里	天平21(749)		右京菅原寺に終る 大倭国平群郡生馬山東陵に火葬す

第一表 奈良盆地発見の墓誌

備考の文章は、墓誌中の文章に拠る

墓などがある生駒谷という従来の説に従っておこう。

以上述べたように、今まで指摘されてきた平城京の葬地は、分布図からも、大まかに裏づけられている。ここでは、北・東・西の三方をさらに検討し、新たにつけ加えるべき京南辺の葬地について述べよう。

## (二) 京北方の葬地

京北方の葬地は、さらに東と西に分けることができる。東側、すなはち、外京の北方、現在の奈良市法蓮町・奈良阪町に広がる佐保山丘陵は、天皇をはじめとする有力貴族の葬地であった。『續日本紀』<sup>(12)</sup>『万葉集』<sup>(13)</sup>『家伝』<sup>(14)</sup>『公卿補任』等の記事によると、元明・元正・聖武の各天皇、仁正皇太后(光明子)<sup>(15)</sup>、太皇太后宮子、藤原不比等<sup>(16)</sup>、武智麻呂<sup>(17)</sup>、飯高宿祢諸高<sup>(18)</sup>、大伴家持の亡妾<sup>(19)</sup>、大伴書持等の葬送地あるいは火葬地として選ばれている。また天柝した聖武の皇子の墓とされ、隼人石で有名な那富山墓<sup>(20)</sup>もある。佐保山丘陵の西縁近く、ウワナベ古墳<sup>(21)</sup>の東北方にあたる奈良阪町で、須恵器の蔵骨器が発見され、内部に萬年通宝二、神功開宝三と墨片が副葬されていた。須恵器の様式から、その年代は奈良末という。また、詳細は不詳だが、新聞報道によると、ここから北約一杆の国鉄操場予定地からは何基かの火葬墓が発見されている。この葬地は、現在関西線・国道二十四号線バイパスの走る谷で切れ、西側には續かないと考える<sup>(24)</sup>。これは、後述のように重要な意味があるので注意しておきたい。

西の群は宮城の西北にあたる。平城宮の北々西約三・五杆の奈良山

丘陵、京都府との県境に石のカラト古墳がある。この古墳は上円下方墳で、下方部の一辺が二三・七米を測る。内部主体は凝灰岩切石を用いた高松塚型の石室で、盗掘されていたが、副葬品は銀装太刀の一部、金・銀・コハクの玉があった。古墳の築造年代は、墳丘や墓道出土の土器からみて八世紀前半と考える。古墳の位置と規模からみて、被葬者はかなり高位者と推定できる。石のカラト古墳の西南、沖積地を隔てた、奈良市押熊町と秋篠町では火葬蔵骨器が出土。<sup>(26)</sup> 押熊例の出土状況は、人骨をおさめた蓋つき壺を土師器高杯にのせ、さらに須恵器大甕におさめている。その年代は八世紀中葉頃と推定。秋篠町西山例は、秋篠寺西の丘陵尾根で発見され、土師器の甕で、蓋があり、和同開珎二枚が副葬してあった。<sup>(27)</sup> 年代は八世紀前半であろう。この発見地周辺は炭化物等が散っており、火葬墓群があったと推定されている。また、宝亀元（七七〇）年八月八日に没した称徳（考謙）天皇の陵は鈴鹿王の旧宅を山陵としたもので、『續日本紀』同十一日条に「大和国添下郡佐貴郷高野山陵に葬る」とあって、この西群に含まれよう。現在、宮内庁治定の山陵は前方後円型を呈し、埴輪片が採集できる。<sup>(28)</sup>

ここで問題となるものに奈良市平松町発見の蔵骨器がある。<sup>(29)</sup> 一九七六年、平城京右京五条四坊三坊にあたる平松町・五条町の発掘で四間二間の東西棟建物の南側柱の柱掘形と重複した土壇から有蓋の薬壺形須恵器が出土。壺内部には和同開珎四枚、筆管、墨挺、及び徴少の骨片と絹織物があった。これは当初蔵骨器とされたが、胎衣を納める壺

中に銭、筆、墨を納める習俗が『玉藥』や『御産所日記』にみえ、<sup>(30)</sup> 本例は胎衣壺の可能性が高く、割愛した。また、小島俊治氏は奈良市七条町でも蔵骨器らしきものが出土したとされるが詳細は不明である。

### ③ 京東方の葬地

一九七九年、奈良原此瀬町で『古事記』の編者太安萬侶の墓誌が発見され、平城宮の東南約八・五杵の田原里が平城京の葬地と判明した。<sup>(32)</sup> 安萬侶墓は傾斜の強い丘陵の南傾斜面にあり、尾根側に直径四・七米程の弧状の溝をめぐらせ、低い墳丘を築いたと推定される。内部に一辺一・七米の方形の土壇を掘り、火葬骨をおさめた木櫃の周囲に木炭を填め、上部を版築土でおおう。墓誌は木櫃の下部に下に向けておさめてあったという。安萬侶墓の発見を契機に、周辺の聞き取りと踏査が行われ、過去に、蔵骨器が四カ所、火葬墓が一方所発見されたこと、<sup>(33)</sup> 北方一杵の誓多林町でも火葬墓の存在したことが確認された。この安萬侶墓の西方に天智天皇第七皇子施基皇子田原西陵がある。<sup>(34)</sup> 施基（志貴）皇子は靈龜二（七一六）年に没し、『万葉集』卷二二・二三〇に笠金村の挽歌があり、春日山麓をゆく葬列の様が詠われている。またその東方には光仁天皇田原東陵がある。光仁天皇は施基皇子の子で天応元（七八一）年二月没、翌年広岡山陵に葬られたが、延暦五（七八六）年、施基皇子の墓があるこの地に改葬された。<sup>(35)</sup> 新羅の僧尼理願も『万葉集』卷三十四・四〇収載歌からこの地に葬られたと推定されている。<sup>(36)</sup> 平城京からこの田原里に至るには、高円山北の石切峠を越えたと想定

(37)  
されている。

太安萬侶墓の東南約九杵、都祁<sup>つげ</sup>盆地の西寄現在都祁水分神社のある都祁村甲岡の独立丘南斜面に小治田安萬侶墓がある。墓の発見は明治末年で、調査は約四〇年後の一九五一年に行われた。その報告から墓の築成過程を復原すると、墓は掘込地業を行ったもので、地山を一遍約三・五米の方形に掘りくぼめ、基底部には玉石を敷き、その上に炭まじりの土と粘土を互層に版築。墳丘は半丘状に盛り上げて土壙を穿ったのち、火葬骨を納めた木櫃と墓誌三枚を置き、墳丘版築上の周縁に三彩陶器や銀銭等の副葬品をおいたようである。木櫃の位置は掘込部の中心とは一致せず、中央より北側にずれていた。この築成過程は、<sup>(38)</sup>最近発見の天理市袖之内火葬墓と似た工法で、終末期古墳のそれと近縁関係にあることがわかる。安萬侶墓に隣接した畑から数十枚にのほる和同銀銭が出土、近くに安萬侶一族の墓があったことが推定されている。<sup>(40)</sup>この安萬侶墓の周辺一・五〜二杵には奈良時代の墳墓が数箇所ある。たとえば、西南の都祁村蘭生<sup>らんせい</sup>には三彩、万年通宝、神功開宝を伴った墓がある。<sup>(41)</sup>西方の天理市鈴原の尾根南斜面から須恵器の有蓋蔵骨器や土師器甕に須恵器の鉢を蓋とした蔵骨器などが出土、この付近に多数の墳墓があったようである。<sup>(42)</sup>また北方の都祁村針からは和同銭六〇〜七〇枚を副葬した土師器の蔵骨器が出土している。同村では、他にも蔵骨器出土箇所があるという。<sup>(43)</sup>霊龜元(七一五)年六月「大倭国都祁山道を開く」(『續日本紀』)とあり、平城京からこの地に至る

のはこの道によったのであろう。京東方の葬地を考える時、問題として残るのが春日山古墳である。自然石で小規模な竪穴式石室を築き、マウンドをもつ遺構が現春日大社の鹿苑から飛火野にかけて六〇カ所余り分布する。<sup>(44)</sup>この一部を調査した末永雅雄氏は奈良時代の古墓とされた。<sup>(45)</sup>ただし、博士はこれらが春日社と近接するため、春日社の創祀との年代的関係を問題にされていた。

これらが奈良時代の古墳とすると、京外とはいえ、春日社という平城京の重要な神社の傍に葬地があったことになり、何らかの特殊な事情を考慮する必要がある。最近、中村春寿氏はこれらの遺構が墓の要件を欠く点をあげ、祭祀終了後の祭具埋納遺跡と考えている。<sup>(46)</sup>この春日山古墳に関してはなお検討が必要であらう。

#### 四 京西方の葬地

河内と大和の境をなす生駒山は東方の田原里などに対する京西の葬地であった。現在この地で知られる被葬者は美努連岡万と大僧正行基である。墓の立地はともに平城京の西約九杵、生駒山脈の東麓から派生した一支丘上である。美努連岡万墓は暗峠道のすぐ北に接した生駒市萩原町の通称竜王塚<sup>(47)</sup>にあり、墓誌は縦二九・七櫃、横二〇・六櫃の銅板で、一行十七字全十一行に銘文を刻む。<sup>(48)</sup>これによると岡万は天武一三(六八四)年正月に連姓を賜わり、大宝元(七〇一)年遺唐使の一員として粟田真人等と渡唐、霊龜二(七一六)年従五位下を授け、主殿寮の長官を歴任、神龜五(七二八)年一〇月二〇日六七歳で死去

したことがわかる。没後三年たった天平二年一〇月に墓誌が作られた。美努氏は元来、河内国若江郡を本貫とする豪族で、大化前代には天皇家の直轄領であった河内国三野県を管理した家柄であった。岡方は本貫地を離れ、京西の葬地に葬られた。美努岡万墓の北〇・七杆の生駒市有里町竹林寺境内に行基墓所がある。文暦二(一二三五)年寺僧寂滅が同墓所を発掘、行基の墓誌と舍利などを得たという。墓誌は径一〇〇、高さ三〇〇以上の銅筒だったらしく、現在その一部を残すのみだが、「行基大僧正舍利瓶記」によって全文知ることができる。これによると、題記・名字・世系・紀歴・死去の時、所・葬送の年、所・墓誌執筆年、筆者名の順に記され、この地に葬られるに至った経緯は、天平二一(七四九)年二月二日右京菅原寺で死去、六日後、生馬山の東陵に火葬したとあり、それは遺命によるとして(50)いる。

この他に生駒山に葬られた有力者には長屋王と吉備内親王がある。『續紀』天平元(七二九)年二月二日条に、長屋王が秘かに左道を学び、国家を傾けんとした罪により自刃せしめられ、翌一三日に「使を遣して長屋王、吉備内親王の屍を生馬山に葬らしむ」とある。現在、生駒郡平群町梨本に二墓が治定されている。

#### (五) 都南方の葬地

平城京周辺の北・東・西の丘陵地帯の他、平野部の河川敷も葬地であった。平城京羅城門の南約一・九杆、大和郡山市稗田で奈良時代の川跡が発掘された。この川跡は、現在の能登川、岩井川など盆地東麓

の春日山・三笠山に源をもつ川の下流部にあたり、京造営時に河道のつけ換えを受け、京東南隅付近から条里に対し約四十五度の角度で西南方向に流れ、東堀河、佐保川と合流、さらに下ッ道を越えたのち秋篠川(西堀河)に合流して大和川に注いだ(51)。この川底から奈良末の多量の遺物とともに、人骨二分分が出土。一体は子供で、体の下に横棒をいれて席でくるみ、頭には曲物を被せていた。検出遺体は二分分だが、同様の席状のものがいくつかみられ、他にも遺体があったらしい(52)。これは埋葬というより遺棄状態に近いが、河原が葬地の一部であった平安京でも事情は変らなかった。『續日本後紀』承和九(八四二)年一〇月一四日条に、左右京職東西悲田院に勅して料物を給い(葛野郡)嶋田河原と鴨河原等の醜體を焼き歛めしむ。惣五千五百余頭とある。貞観一三(八七一)年閏八月二八日付太政官符では、葛野郡五条荒木西里六条久受里と紀伊郡十条下石原西外里十一条下佐比里十二条上佐比里を百姓葬送放牧之地と定めた(53)。このうち紀伊郡の葬地は西二坊大路にあたる佐比大路の南、鴨川と桂川の合流部付近に比定される(54)。中世、地藏信仰の隆盛とともに人口に膾炙した賽の河原伝説はこの佐比の河原を語源とする(55)。平城京にあっても、この紀伊郡の葬地と位置的にも地理上からも似た京城南の稗田から西方一帯の河川敷が百姓葬送地であった可能性はある(56)。この推定が正しいとすれば、平安京にみられる京城南辺の河川敷の葬地は平城京の伝統を引くことになる(57)。法を侵して葬地以外の川に死体を遺棄することは京内でも珍らしい

ことではなかったようだ。九条々間路と交叉する東堀河では奈良時代末の遺物、牛馬の骨に混ってひとの頭蓋骨が出土した。<sup>(58)</sup>これに関連して想起するのが神護景雲三（七六九）年五月十九日、懸犬養姉女等が称徳天皇を呪詛した廉で配流された事件である。その呪詛は、佐保川の鬮體を宮内に持ちこみ、これに天皇の頭髮を貼りつけて行うものであった。佐保川は京造宮時に流路をつけ換えられ、廃都後にも流れが変ったが、<sup>(60)</sup>左京を流れる最も大きな河で、『萬葉集』にも多く詠われている。この事件では鬮體を拾った位置は不明だが、東堀河の例とあわせ、こうした川も常に骨が転っている状態にあったのだろう。

### 三 藤原京の葬地

平城京と藤原京の葬地の違いを明確に示すのは、天武・持統・文武という浄御原宮と藤原京の時代の天皇陵が京南方の丘陵地帯に位置、あるいは推定されることである。『阿不幾乃山陵記』によって天武・持統合葬陵であることが確実視される檜隈大内陵は、藤原京中軸線の南延長線上に位置する。<sup>(61)</sup>この西に鬼の狙廁古墳、西南には、発掘調査により八角型と判明し、文武天皇陵説が有力な中尾山古墳、<sup>(62)</sup>および壁画で有名な高松塚古墳があり、最近その南で同じく壁画をもつキトラ古墳が発見された。また、西方の真弓丘にはマルコ山古墳・牽牛塚古墳<sup>(64)</sup>があり、やや西南に離れるが、松山古墳（高取町）など七世紀第三

―四半期から第四―四半期に推定される古墳がある。文献史料によると草壁皇子（岡宮天皇）は真弓丘陵（延喜式諸陵寮）に、川島皇子は越智野<sup>(65)</sup>に葬られた。このように藤原京城の南および南西丘陵地帯は、藤原京の時代の天皇、皇子および貴族の葬地として、平城京北方の葬地と対比しうる重要地域であった。では、藤原京の葬地はこのみであったかという点、平城京同様東方と西方にも想定しうる。まず東方の葬地から検討してみよう。その候補地としてあげるのは、横大路を東にとり伊賀へ通じる初瀬谷に沿った、現在の桜井市から榛原町にかけての丘陵地帯である。たとえば、壬申の乱の功臣で慶雲四（七〇七）年に没した文祢麻呂（書首根摩呂）墓誌は、藤原京東方約一五・八軒の榛原町八滝（宇陀郡内牧村）から出土。<sup>(66)</sup>彼は渡来人系の西文氏の出身で、壬申の乱の功により功封一百戸を賜い、死後正四位上を賜位。本貫地が不詳という点問題が残るが、ここに埋葬されたのは、その埋葬年代からみてここが藤原京の葬地であったためである可能性がある。文祢麻呂墓から西南五軒程藤原京に寄った宇陀郡大宇陀町拾生字城山からは凝灰岩製石櫃の外容器におさめた金銅製蔵骨器が出土している。金銅製蔵骨器は類例が少ないため年代決定には困難が伴うが、一応七世紀末から八世紀初頭と推定される。<sup>(67)</sup>この拾生の西隣の桜井市栗原は『續日本紀』に注目すべき記事がある。同書文武四年三月条に「道照和尚物化す。（略）第子等遺教を奉じて栗原に火葬す。天下の火葬此より始れり」とある。この卒伝には、和尚は河内国丹比郡人也、俗称



船連とあって、この粟原の地との関連は不詳だがやはり藤原京の葬地との関連を考慮すべきであろう。

初瀬谷に沿う丘陵地帯が藤原京東方の葬地とする想定の際証が『万葉集』挽歌である。この挽歌には葬送地、火葬地を意味する山の名に泊瀬山が七首あまり登場する。泊瀬山を詠みこんだ歌には年代不詳歌が多いが、柿本人麿の「土形娘子火葬泊瀬山時、柿本朝臣人麿作歌一首」(巻三―四二八)も含まれ、藤原京の時代にすでに初瀬山が葬送地の象徴であったことがわかる。藤原京から榛原町にかけては文珠院西古墳、舞谷古墳、忍坂八・九号墳、花山西古墳など七世紀中葉から同第IV四半期に推定される古墳が点々と存り、在地努力による前代以来の葬地が藤原京の時代にも踏襲されたのであろう。その伝統は平城遷都後にも続いた。

次に西方の葬地を検討してみよう。藤原京域の南西に接する橿原市久米ジカミ子遺跡では、火葬墓とされる炭化物と須恵器の入った土壙九箇所が検出され、伴出の須恵器などから、その年代は七世紀中葉から末まで三期に区分できるといふ<sup>(70)</sup>。これが、火葬墓として確実であれば、藤原京西方の葬地として類例の増加が期待できる。西方葬地として今ひとつ候補にあげるのは、横大路の西、穴虫越えに沿った葛城山東麓の地域である。この一画、北葛城郡香芝町穴虫字馬場からは威奈大村墓誌が出土している<sup>(71)</sup>。威奈大村は、墓誌によると持統・文武朝に出仕し、慶雲四(七〇七)年四月正五位下越後城司(守)として任地

に病没、同年十一月に大倭国葛木下郡山君里狛井山崗に帰葬したとある。威奈大村がここに葬られたのは、この地が藤原京の葬地であったためであろう。威奈大村墓に近接した穴虫字シバヤマからは威奈大村の凝灰岩製の外容器が出土し<sup>(72)</sup>、また東南にあたる加守からは金銅製威奈大村の器が出土<sup>(73)</sup>、ともに八世紀代と推定される。藤原京の葬地の伝統が続いているのであろう。また、天武の皇子である高市皇子の墓は「延喜式」諸陵寮に「三立岡墓 高市皇子在大和国広瀬郡、兆城東西六町南北四町無守子」とあり、これは馬見丘陵中に推定されている<sup>(74)</sup>。京西方の葬地はこの馬見丘陵にまで及んでいたのであろうか。

以上、藤原京の葬地として、従来一般的に説かれてきた京南西の古墳群の他にも、京の東方と西方にもそれぞれ葬地を推定してきた<sup>(75)</sup>。この藤原京の葬地と平城京のそれを比較してみると、天皇陵の分布が南方から北方に移るといふ顕著な違いがある。このことから平城京の葬地の原型を藤原京に求めることには困難がある。

次に、平城京の葬地の原型を検討するため、奈良朝政府が多くの文物、制度を移入した唐代の西都長安と東部洛陽の場合をみてみよう。

#### 四 唐・長安城と洛陽城の葬地

##### (一) 西都長安の葬地

唐代の首都長安において、皇帝以下庶民にいたる墳墓の地はいかな

る場所に営まれたのであろうか。まず皇帝陵の分布をみてみよう。

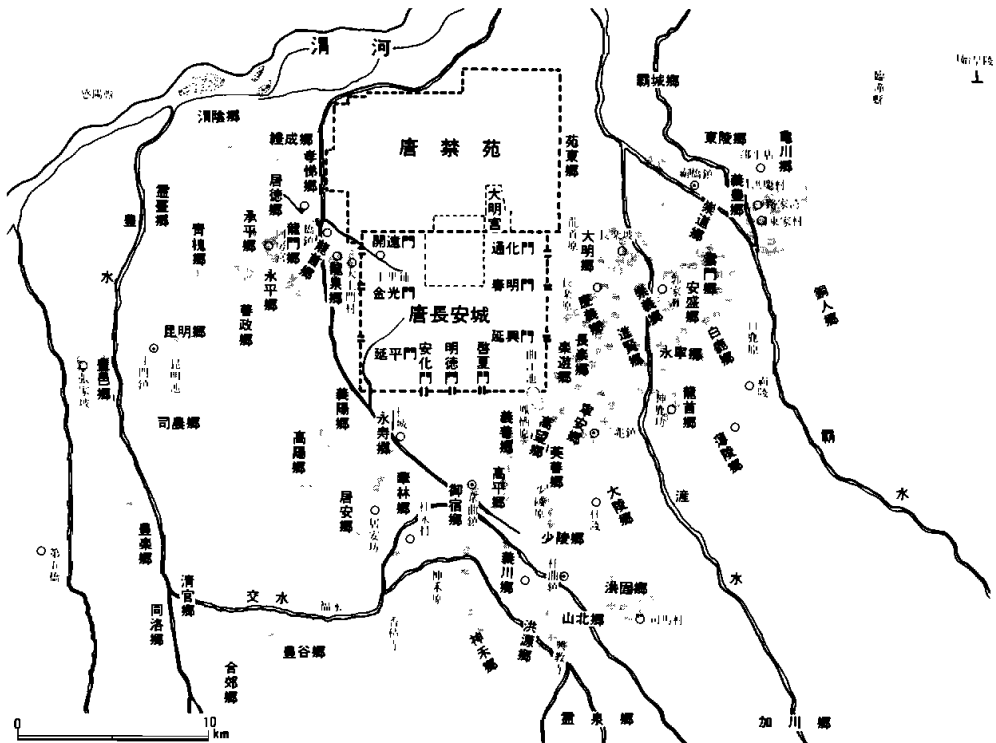
唐（六一八～九〇七）では二〇代の皇帝が即位した。このうち、初代の高宗から僖宗に至る十八代の皇帝陵は長安北方、関中盆地の乾泉、礼泉、涇陽、三原、富平、蒲城にあり、唐朝末期の二代の陵は河南と山東にある。十八代の皇帝陵は関中にあるので、関中十八陵と呼ばれている。<sup>(76)</sup>十八陵のうち十四陵は、海拔二〇〇～一六〇〇米の山上にトンネルを穿って墓室としたものである。各々の陵は広大な陵園をもち、陵園の付近には、太宗の昭陵以降、陪葬区が設けられ、皇族より文武の勲臣にいたる陪葬墓が営まれた。<sup>(77)</sup>現存する陪葬墓は昭陵の一六七墓を筆頭に、三八六墓に達する。<sup>(78)</sup>このように皇帝陵とその陪葬墓は長安の北方にあるが、長安から各陵までの距離は、直線距離で実に八〇～一〇〇軒に達する。<sup>(79)</sup>また長安の西北、渭水の北の咸陽には武則天の母楊氏の順陵があり、陪葬墓も発見されている。<sup>(80)</sup>さらに墓誌には「葬於京兆咸陽縣洪濱川之北原（開元六齋希臧神道碑）」などと記したものがあり、単に咸陽とのみ記した碑文・墓誌を合わせると一四近い例がある（『文苑英華』による）。

次に長安近郊の葬地をみてみよう。長安近郊における唐代の墳墓数は明らかでないが、陝西省文物管理委員会の報告によると、建國以来西安地区で発掘整理した隋唐墓が約二〇〇〇基であるという。<sup>(82)</sup>そして西安近郊の主要葬地として東郊の韓森寨、郭家灘、高樓村の一带、西郊の土門、畫園一带をあげている。この報告は長安近郊の主要葬地を

発掘の成果から初めて指摘した点で重要だが、記述が簡潔にすぎ、長安近郊の葬地の具体的内容までは触れていない。そこで次の資料によってその欠を補うことにしよう。

- (一) 中国建国以来、各種の考古報告書に報告された唐代の墳墓資料（一部隋代を含む）。墓数約二二九基以上、うち伴出した墓誌の数五三
- (二) 武伯綸氏が「唐万年・長安縣鄉里考」<sup>(83)</sup>において引用された唐代の墓誌・神道碑文のうち(一)にみえない未報告の三一例
- (三) 愛后元氏が「唐代西京鄉里考」<sup>(84)</sup>において各種文献から引用された唐代の墓誌・神道碑文など九七例
- (四) 『文苑英華』に収載の碑文・墓誌銘のうち、長安周辺の地名を記したと判断できるもの五九例

(一)から(四)まで合わせた墳墓と墓誌・神道碑文の数は約四一六となる。これは西安周辺の隋唐墓の数、約二〇〇〇基の約二割であり、陝西省文物管理委員会の報告と合わせることで、長安周辺の葬地をある程度知ることができよう。その詳細は表二・三に譲り、以上の資料を地図に投影したのが第二図である。地図は愛后氏が復原された「長安郊区郷比定図」<sup>(85)</sup>を利用させていただいた。この図は、長安周辺の墳墓分布図というより、概念図と表現することがふさわしいが、中国の遺跡地図が未公開の現状では止むを得ない。図では、唐の墳墓は長安城の北に接した地域を除き、周辺地域に分布する。長安周辺の地形は東



第二図 長安周辺の葬地概念図

本図は愛后元氏作成の「長安郊区郷比定図」をもとに、報告のある唐代墳墓、墓誌等の史料にみえる葬地を投影したもの。図中の数字は発見墓の数を示す。ゴチックの郷名は愛后氏による比定郷名を示し、○印明朝は現地名を示す。

南が高く、西北に向って傾斜している。南側の山からは澧水、澧水、灃水等の河川が流れ出している。これらの河川によって開析された平原の多くの場合、南向きの地に唐代の墳墓が営まれている。平原の名称は墓誌によると龍首原・細柳原・銅人原（城の東北）、長原（城東）、白鹿原（城東から東南）、鳳栖（棲）原、少陵原（城の東南から南）、神禾原（城南）、高陽原（城の西南）、龍首原・馬駒原（城西）などがみえる。平原は南から北に長く連なるため、同じ名が数郷にまたがることがある。たとえば白鹿原は、洪原・洪国・高平・澧川の各郷にまたがる。ただし、こうした原の範囲はかなり曖昧で、同一郷で別の原の名も見られる。長安周辺の墳墓の分布が特に濃いのは城の東北から東南にかけての地域で、墓誌の地名では銅人原・白鹿原・龍首原・鳳栖原・少陵原である。このうち先の報告で東郊の主要葬地とされた韓森寨・郭家灘・高樓村一帯は白鹿原にあたる。ここは長安城の通化門（東面北門）、春明門（東面中門）から近い距離にある。<sup>(86)</sup>

この東郊の葬地には、その一部が付表にも表われているように、貴族・官僚・地主・富商階層の墓が集中しているとされる。『西安郊区隋唐墓』は、その理由について、当時大明宮に近い里坊にこの階層が集中しており、白鹿原が居住地から至近距離にあり、交通の便のよいためから選ばれたと述べている。<sup>(87)</sup>

他方、長安西郊の葬地は第二図によって分布状況を知ることができない。先に西郊の主要葬地の一つとされた土門は、長安城開遠門（西

面北門)の西に接した土門村を指す<sup>(88)</sup>ようである。棗園はその西方約三  
秆にある。両地区の墳墓の実態、被葬者の性格は報告が数例しかなく  
明らかでない。

長安城の西約一〇秆、客省庄、張家坂では三九基の唐墓が発掘され  
ている。この墓の場合、二、三の例外を除き、大半は墓の規模が小さ  
く、副葬品も少ないことから、平民階級の墓ではないかという。彼等  
は付近の村落の住民か、そこから比較的近い長安城南半の里坊の住民  
かの二通りの可能性があげられている。後説の背景としては、これら  
の墳墓が宮まれた頃、長安城南半の里坊が比較的荒廃し、居住者の大  
半が平民階級であったことによるとしている。<sup>(89)</sup>

墓誌や神道碑を残しうる階級が、ある程度限定されることを考慮す  
ると、長安西郊葬地の被葬者の階級は東郊にくらべ、相対的に低い可  
能性がある。

なお、『隋開皇令』には「在京師葬者、去城七里外」の条文があり、  
唐令にもその存在が推定<sup>(90)</sup>されている。表二に明らかのように、城内に  
少数の墳墓があるが、大多数は城外である。ただし、蘇思勗墓は興慶  
宮址の東南約〇・五秆から発見されているし、西郊の土門は長安城開  
遠門の西約二秆であるから、距離的に問題があり、年代やその他の条  
件の吟味が必要であろう。

## (二) 東都洛陽の葬地

洛陽における唐代の葬地を知る第一の手懸りは発掘報告である。河  
南省博物館は洛陽市および周辺の県でいくつかの唐墓を発掘したとい  
うが、洛陽の葬地に関する報告は少ない。洛陽城の皇城内からは趙孝  
墓(鄭の開明二年)が発見<sup>(91)</sup>されている。これは隋唐宮城の長楽門と応  
天門との間の南、唐の四方館と左衛率府付近にあり、王世充が東都留  
守であった越王楊侗皇帝の帝位を篡奪した翌年(六二〇年)に作ら  
れた。「鄭」は王が建てた国号である。洛陽城の南郊にある閔林では、  
唐墓三〇〇基余りが発掘されたというが、報告があるのは僅か三基  
(M二・五九・一〇九)である。五九号墓からは優秀な唐三彩の俑が出  
土<sup>(92)</sup>し、M一〇九号(盧夫人墓天室九、七五〇)からは、径三〇・五糧  
の金銀平脱鏡が出土している。閔林は隋唐洛陽城の南約五里(二・九  
秆)<sup>(93)</sup>で、龍門の北方にあたる。ここが洛陽の一大葬地であることは動  
かないようである。隋唐洛陽城の南八秆、龍門東山北麓からは、唐定  
遠將軍安善と妻何氏の合葬墓(景龍三、七〇九年)が発見<sup>(94)</sup>されている。  
この他、洛陽老城の西二五里(約一三・三秆)の澗河南岸にも隋唐墓  
がある。ここでは約四〇基の北朝および隋唐墓が発掘されている。愛  
后元氏は、先の「唐代兩京郷里村考」で文献を渉獵し、洛陽の葬地に  
関連した墓誌・神道碑文をあげておられる。このうち、唐代の遺文は  
約一〇〇例を数える。この遺文の内容を検討しても、洛陽最大の葬地  
は、北方の邙山<sup>(95)</sup>であることがわかる。邙山は洛陽の北方に、東西に長

表二 長安周辺発掘の隋・唐墓と墓誌

発見地	墓数・No	葬送時	墓主人	地位	終焉之地	墓誌に見る葬送地	備考・出典
西安東郊經五路緯十路南(興慶宮遺址東南約〇・五km)	59 M 1	天寶四・七四五	蘇思昂	銀青光祿大夫		萬年泉長案原	「西安東郊唐蘇思昂墓清理簡報」考古一九六〇—一
西安東郊經一路北端南距緯十街延伸段	4号	開元一六・七二八	史氏 ♀薛莫	雷氏夫人		萬年泉長案鄉界龍首之原	「西安東郊唐墓清理記」考通一九五六—六 「西安韓森案唐墓清理記」考通一九五七—五
西安東郊韓森案附近	隋 109	天寶四・七四五	宋氏	東騎將軍 左衛副率 趙君夫人		大興泉寧安鄉 萬年泉長案鄉之純化里 長案鄉 萬年泉澆川鄉鄭墟 萬年泉長案鄉之平原	「西安東郊唐墓」
西安東郊韓森案西高二机福	5号	開皇一二・五九二	呂武	贈揚州大都督		龍首原長案鄉王柴村原	
西安東郊韓林案西高八〇三工地	2号	貞觀一三・六三九	段元哲	蘇州長史			
西安東郊十里鋪澆河之西岸	1号	麟德二・六六五	劉寶	潤州司馬妻			
西安東郊距城約十里澆河東、白鹿原西麓	181	建中三・七八二	曹景林	蘇州長史			
西安郭家灘	337	元和中二・八〇七	董楹	潤州司馬妻			
	181	元和中七・八一二	楊氏	照人			
	515	元和一三・八一八	張十八娘	潤州長史			
	602	寶曆一・八二五	董岌	潤州長史			
	602	大和四・八三〇	李文政	金吾衛大將軍			
	602	開成二・八三七	董氏	贈隴西郡夫人			
	515	大中四・八五〇	何溢	茂州刺史			
	2号	開元一七・七二九	馮滯州	贈滯州刺史			
	5号	天寶一五・七五六	高元珪	左威衛將軍			
	1号	大中一・八四七	高克从	監軍使			
	隋 1	(中唐)	李君				
	隋 1	大並六・六一〇	田德元	龍泉郭煌太守			
	隋 1		姬威				

西安郭家灘	唐 <sup>22</sup> ・409 唐 <sup>22</sup> ・420	大中二・八四八 大中二・八五八	鄭德柔 路復源	齋州刺馬妻 河南府含曹參軍	興安里第 河南宿舍	萬年泉崇義鄉白鹿原	『西安郊区隋唐墓』一九六六 『寶鷄和西安付近考古発掘簡報』考通一九五五―二 『西安郭家灘唐墓清理簡報』考通一九五六―六 『西安白鹿原墓群發掘報告』考学一九五三―三
東北約八華里 "・唐長安城	多・50 395	天宝三・七四四	(史思禮)			城東白鹿原澆川鄉之原	『西安白鹿原墓群發掘報告』考学一九五三―三
西安白鹿原	隋 <sup>4</sup> ・42	大業一・六一五	劉世恭				
西安白鹿原	唐 <sup>15</sup>	四基・初唐 五基・中唐 五基・中晚唐					
西安西北園綿四廠	唐 <sup>3</sup> M <sup>3</sup> M <sup>2</sup> M <sup>1</sup>	貞元一・七五八 元和一四・八一九 長慶三・八二三	李良 章合信 李文貞 卑失氏	右龍武軍大將軍 李文貞の継室	澆川里私第 静恭里	萬年泉白鹿原 萬年泉澆川鄉尚得村 觀台里 萬年泉澆川郷口伝村 觀台里	『西安東郊三座唐墓清理記』考与文一九八一―二
西安東郊王家墳村東	唐 <sup>1</sup> ・90	盛唐					
西安東郊高樓村	唐 <sup>2</sup> ・131	天宝七・七四八	吳守忠	羽村軍長史	咸寧泉東原		『西安東郊王家墳清理了一座唐墓』文參一九五五―九 『西安王家墳村第九〇号唐墓清理簡報』文參一九五六―八 『西安高樓村唐代墓群清理簡報』文參一九五五―七
" 洪慶村	唐 <sup>5</sup> ・305	開元一四・七二六 景雲一・七一〇	慕容氏 李仁	李仁妃 成王	洛陽欽善里私第	京兆郡之銅人原	『西安郊区隋唐墓』一九六六
西安東北郊霸橋区洪慶村之南	唐 <sup>3</sup>	神功二・六九八 長安三・七〇三 景龍三・七〇九 長安三・七〇三	独孤思貞 元氏 独孤思敬 揚氏	朝議大夫乾陵令 独孤思敬夫人 朝散大夫 独孤思敬継室	官舎 禮泉里第 豐安里私第	銅人原 夫氏之旧塋 萬年泉銅人郷 萬年泉銅人原	『唐長安城郊隋唐墓』一九八〇

西安東北郊霸橋區洪慶村之南	唐 1	廣德二・七六四	韓氏	吳貴夫人		『西安郊區隋唐墓』一九六六
西安東南四km等賀坂村北・八km	唐 1	開元二八・七四〇	楊思勗	驃騎大將軍	翊善里之第	玄宗宦官『唐長安城郊隋唐墓』一九八〇
西安城南八公里雁塔區羊頭鎮村西曲江池遺址南岸	唐 1	總章一・六六八	李爽 鄭氏	銀青光祿大夫	官舍	『西安羊頭鎮唐李爽墓的發掘』 文物一九五九一三
西安南郊羊頭鎮西南約五〇〇m	唐 1	龍朔二・六六二 麟德一・六六四	張楚賢 王氏	張君夫人	雍州之第	右と同一か。『西安南唐墓發 現壁畫』文參一九五六一六
西安南郊三爻村新建村片	唐 4	元和六・八一 大中八・八五四	崔諱絃 時氏	中書令 裴氏夫人	通軌里之第 長樂里	『西安南郊三爻村發現四座唐 墓』考与文一九八三一一三
西安南郊曹家堡村東	唐 1	咸亨三・六七二	牛弘滿	玄都觀主	永興里之私第	『西安市唐玄都觀主牛弘滿墓 文叢一九七七一一二
西安南郊廟留村西北角	唐 1	至德三・七五八	唐壽王第 六女	贈清源臬主	(西崇坊)	『西安南郊廟留村的唐墓』 文參一九五八一〇
西安南郊嘉里村	唐 1	大中四・八五〇	裴氏小娘 子		咸寧洪源鄉少陵原	『从西安唐墓出土的非州黑人 陶俑說起』文物一九七九一六
長安東東北二km章曲原 上南里王村	唐 1	景龍二・七〇八	章洞	中宗章后弟	長安里梨宿川神禾原	『長安東南里王村唐章洞墓發 掘記』文物一九五九一八
長安郊郭杜鎮	唐 1・1	顯慶三・六八五	執失奉節	常業府果毅		突厥人執失思力の子『唐墓壁 畫』文參一九五九一八
長安東紀陽公社北田村 西一〇〇m	唐 1	大歷二・七七六	瞿曇謙	司夫監	長安城西渭水南原	『唐代天文学家瞿曇謙墓的發現 文物一九七八一〇
西安市玉祥門外西站大街南五〇m	隋 1	大並四・六〇八	李靜訓	李公四女	長安東休祥里萬善道場 內	『唐長安城郊隋唐墓』一九八 一九八〇
西安市西郊南何村西北 西安市西郊三橋附近	唐 1 唐 ?	開元一一・七三三	鮮于庭誨	贈右領衛大將軍	安定里	『西安市西驛頭村唐墓清理記』 考古一九六五一一八

西安市西郊二公里土門村附近	唐1・2	咸通一五・八七四	蘇諒妻馬	散兵馬使		「西安發現晚唐祿教徒的漢婆囉鉢文合璧墓誌」唐蘇諒妻馬氏墓誌一」考古一九六四一九
西安市西郊小土門村		廣明一・八八〇	師弘礼			「兩块唐墓誌与唐末農民起義」考与文一九八三—二
“		光化二・八八九	李令崇			“
西安市阿房区西客頭村西南〇・五km		中、晚唐	米繼芬			この地は西域人の墓地という。
西安西郊中堡村	唐1	盛唐	史那毗加持勤			「西安市西客頭村唐墓清理記」考古一九六五—八
“ 棗園	多?					「西安西郊中堡村唐墓清理簡報」考古一九六〇—三
“ 客省庄	唐16	証經一・六九五	郭嵩			「文物考古工作三十年」一九七九
“ 張家坂	唐23・223 唐・203	景龍二・七〇八	郭恒恆	龍州刺史	長安東豐邑鄉 豐邑鄉馬鄔原	「西安郊区隋唐墓」一九六六

本表で使用する略号

墓主人の( )は公表された拓本が不詳明で不明瞭のもの

考通：考古通迅

考学：考古学報

考与文：考古与文物

文参：文物参考資料

文叢：文物資料叢刊



表三 長安周辺発見の唐代墓誌・神道碑文

所載墓誌等	送葬地	時期	備考
李思貞墓誌	雍州萬年縣澧川鄉務政里長樂原	神龍一・七〇五	武伯倫「唐万年、長安原鄉里考」考古學報一九六三—二 以下 「武氏論文」と略 一九五三年西安東郊高樓村出土
史思禮墓誌	萬年縣澧川鄉白鹿原	天寶三・七四四	「武氏論文」 一九五四年西安東郊郭家灘出土表二—一と同一か
王訓墓誌	萬年縣澧川鄉澧川原	大曆二・七六七	金石萃編卷九四
劉奇秀墓誌	澧川鄉	貞元一四・七九八	「武氏論文」一九五三年西安東郊郭家灘出土
張榮恩墓誌	長安東澧川鄉崇義里鄭村北二里之地	太和九・八三五	「武氏論文」一九五六年西安東郊韓森寨出土
劉士環墓誌	京兆府萬年縣澧川鄉再接鄭村之原野	會昌一・八四一	〃
梁元翰墓誌	萬年縣澧川鄉上傳村觀台里	會昌四・八四四	「武氏論文」一九五四年西安東郊郭家灘出土
李從証墓誌	京兆府萬年縣澧川鄉上傳村	大中五・八五一	古誌石華統編卷二 唐文拾遺卷三一
田文雅墓誌	(萬年縣澧川鄉)管台里	咸通二・八六一	「武氏論文」一九五五年西安東郊郭家灘出土
吳承泌墓誌	京兆府萬年縣澧川鄉北姚村	乾寧二・八九五	金石萃編卷一一八 古誌石華卷二四
趙郡李氏孀女墓石記	萬年縣高平鄉西焦村	貞觀一七・六四三	「武氏論文」匭齋藏石記卷二八
韋君神道碑	萬年縣高平鄉少陵原	元和一・八〇六	文苑英華卷九〇二
楊迴墓誌	萬年縣高平鄉高望里	太和八・八三四	「武氏論文」關中金石文字存逸考卷二
蕭勝墓誌	萬年縣寧安鄉鳳栖之原	永徽二・六五一	續語堂碑錄乙 唐文拾遺卷六四
顏勤禮神道碑	京城東南萬年縣寧安鄉之鳳栖原	顯慶六・六六一	「武氏論文」
王真公主墓誌	萬年縣寧安里鳳棲原	至德一・七五六	金石彙目編卷一一二之一
李琮墓誌	萬年縣寧安鄉杜光里	太和九・八三五	八瓊室卷七二
仇士良神道碑	萬年縣寧安鄉鳳棲原杜季村	會昌三・八四三	文苑英華卷九三二
高武光神道碑	萬年縣鳳棲比原	大曆八・七七三	〃 卷九四二
白道生神道碑	萬年縣鳳棲原	永泰一・七六五	〃 卷九〇八
妻霍國夫人王氏神道碑	萬年縣鳳栖之原	大曆一二・七七七	〃 卷九三四
彭獻忠神道碑	萬年縣鳳棲原	元和一二・八一七	〃 卷九三二
趙虔章墓誌	萬年縣寧安鄉三趙村	乾符三・八七六	金石續編卷一一 古誌石華卷二三

崔 蕃 墓 誌	京兆□□年縣寧安鄉曲□坊	太和七·八三三	八瓊室卷七二
揚崇夫人甘氏墓誌	京兆府萬年縣寧安鄉曲池坊	乾符三·八七六	「武氏論文」
揚弘夫人李雅墓誌	京兆府萬年縣寧安鄉通安里	乾符四·八七七	「武氏論文」一九五五年曲江池東南三兆鎮附近繆家村出土
李 紹 墓 誌	長樂縣長樂里	貞觀一六·六四二	「武氏論文」一九五六年出土
段 伯 陽 墓 誌	萬年縣長樂鄉界南窰村西南一百步	龍朔一·六六一	西安歷史述略三二八頁一九五六年西安東郊韓森寨附近出土
張君夫人田氏墓誌	城東龍首原長樂鄉王柴村向南與壽春坊路通也、其地北帶、涇渭、西望秦原	天授三·六九二	八瓊室卷四〇
李崇望夫人王氏墓誌	(殯) 京城東長樂鄉春明里	天冊萬歲一·六九五	「武氏論文」一九五五年出土
張 景 墓 誌	萬年縣長樂鄉古城之陽	神龍一·七〇五	續陝西通志稿卷一四四
醜西李夫人墓誌	萬年縣長樂鄉王柴村	元和一四·八一九	“ 卷一五〇
史用 誠 神 道 碑	京兆府萬年縣長樂鄉宋候之西原	太和四·八三〇	文苑英華卷九一〇
李 雍 墓 誌	(權芝) 萬年縣龍首原	開元一九·七〇八	“ 卷九五六
府 達 墓 誌	萬年縣龍首原	貞元二〇·八〇四	“ 卷九六〇
王 榮 神 道 碑	鳳城東南龍首原	元和三·八〇八	“ 卷九〇九
王善相夫人祿氏墓誌	京城南洪固鄉界韋曲	永隆二·六八一	「武氏論文」閩中金石文字存逸考卷一
韋 鈞 神 道 碑	萬年縣洪固鄉	開元二二·七二四	文苑英華卷九二二
韓 澁 行 狀	京兆府萬年縣洪固鄉曹貴里	貞元二·七八六	“ 卷九七三 全唐文卷五三〇
渾 侃 神 道 碑	萬年縣洪固鄉曹貴里	咸通三·八六二	“ 卷九一六 “ 卷七九二
馬 實 墓 誌	萬年縣洪固鄉延信里司馬村之少陵原	貞元一四·七九八	“ 卷九四九
杜 詮 墓 誌	長安城南少陵原司馬村	不 詳	“ 卷九五八
杜牧自撰墓誌	少陵司馬村	大中七·八五三	“ 卷九四六
尼 韋 契 義 墓 誌	萬年縣洪固鄉之畢原	元和一三·八一八	金石續編卷一〇 八瓊室卷六九
吳 達 墓 誌	萬年縣洪固鄉畢原	元和一四·八一九	金石萃編卷一〇八 匄齋卷三一
魏遼夫人趙氏墓誌	萬年縣洪固鄉北韋村北原	會昌五·八四五	金石續編卷一一
論 惟 賢 墓 誌	萬年縣洪固鄉之古原	元和四·八〇九	文苑英華卷九〇九
王 紹 神 道 碑	萬年縣之洪固鄉	元和一〇·八一五	“ 卷八九七

渾 喊 神 道 碑	萬年縣洪固原	貞觀一六・六四二	文苑英華卷八八六
柳 嘉 泰 神 道 碑	萬(年縣)洪固之原	開元二七・七三九	〃 卷九〇八
好 唐 端 墓 誌	萬年縣義善鄉	開元二二・七二四	古誌石華卷一〇 唐文拾遺卷六六
李 推 賢 墓 誌	萬年縣義善鄉大什村鳳樓原	乾符三・八七六	「武氏論文」
王 同 人 墓 誌	京南大什村	開元一六・七二八	續陝西通志稿卷一四六
唐 欽 墓 誌	萬年縣義善原	貞元二〇・八〇四	文苑英華卷九五六
張 侁 墓 誌	萬年縣崇義鄉南姚里	太和三・八二九	關中金石文字存逸考卷五 唐文續拾遺卷五
王 守 琦 墓 誌	鄉日崇義、村日南姚	大中三・八四九	八瓊室卷七五
劉 遵 禮 墓 誌	萬年縣崇義鄉澆川西原	咸通九・八六八	金石萃編卷一七
李 冲 寂 墓 誌	萬年縣龜川鄉之平原	永淳二・六八三	文苑英華卷九五〇
李 儼 墓 誌	萬年縣龜川鄉細柳原	永泰一・七六五	〃 卷九三五
李 又 神 道 碑	長安細柳原東北望帝京二十有五里	開元四・七一六	〃 卷八九三
信 王 墓 誌	細柳原	大曆九・七七四	〃 卷九三五
鄭 國 公 墓 誌	〃	永泰一・七六五	〃
韋 端 夫 人 王 氏 墓 誌	(殯) 萬年縣加川鄉西原	大曆一三・七七八	關中金石文字存逸考卷二 金石續編卷九「武氏論文」
郭 榮 神 道 碑	銅人鄉銅人里	貞觀二二・六三八	「武氏論文」
吳 巽 墓 誌	京兆府會昌縣銅人原	天寶七・七四八	〃
揚 君 夫 人 李 氏 墓 誌	萬年縣同仁鄉仇白村	大順二・八九一	匄齋卷三六
李 元 寶 墓 誌	國東門之外七里、鄉日慶義原日崇原	不詳	文苑英華卷九四六
濟 度 寺 比 丘 尼 法 燈 法 師 墓 誌	雍州明堂縣義川鄉南原	天寶二・七五三	關中金石文字存逸考卷五 唐文拾遺卷六四
劉 感 墓 誌	咸寧縣黃壹鄉	大曆二・七七七	金石萃編卷八九
元 載 傳	萬年縣界黃壹鄉	開元一八・七三〇	旧唐書卷一一八
高 木 盧 墓 誌	京兆府崇道鄉齋禮里白鹿原之石	元和五・八一〇	「武氏論文」一九五五年西安東郊郭家灘出土
李 縑 墓 誌	萬年縣崇道鄉西趙原	太和八・八三四	白氏長慶集卷二五 文苑英華卷九三五
鄉 王 李 經 墓 誌	京兆府萬年縣崇道鄉夏里	開成一・八三六	「武氏論文」一九五二年霸橋東南大家村出土
馮 宿 神 道 碑	京兆萬年縣崇道鄉白鹿原	開成五・八四〇	金石萃編卷一一三
安 王 墓 誌	京兆府萬年縣崇道鄉之原		「武氏論文」霸橋新興堡出土

南安郡王夫人仇氏墓誌	萬年縣崇道鄉只道里	大中五·八五一	續陝西通志稿卷一五二「武氏論文」
路全交墓誌	萬年縣崇道鄉白鹿原	大中八·八五四	「武氏論文」一九五四年西安東郊郭家灘出土
楚國夫人揚氏墓誌	萬年縣崇道鄉夏侯村	咸通八·八六七	續陝西通志稿卷一五三「武氏論文」
郭克全墓誌	萬年縣崇道鄉蛇村里	咸通一四·八七三	「武氏論文」一九五五年西安東郊郭家灘出土
上邽縣君李氏墓誌	萬年縣白鹿	神龍一·七〇五	文苑英華卷九六五
田布神道碑	萬年縣白鹿原	長慶二·八二二	「卷九一四
減公神道碑	白鹿原	開元一八·七三〇	「卷九〇七·九四九
王公素墓誌	京兆府萬年縣霸城鄉招賢里	大中一三·八五九	續陝西通志稿卷一五二「武氏論文」
皇第五孫女墓誌	京兆咸寧縣義豐鄉之銅人原	天寶一三·七五四	續陝西通志稿卷一四七
和政公主神道碑	萬年縣義豐之銅人原	廣德二·七六四	顏魯公文集(三長物齋叢書本)卷八
宣郡公主墓誌	萬年縣義豐鄉銅人原	貞元一九·八〇三	「武氏論文」一九五五年霸橋東南惠家村出土
李瞻夫人蕭氏墓誌	義豐鄉銅人原	元和七·八一七	「武氏論文」一九五六年霸橋東南路(魯)家灣出土
李稷墓誌	「	太和七·八三三	「武氏論文」一九五六年霸橋東南紅(洪)慶村出土
馬公神道碑	萬年縣銅人原	貞元一·七八五	文苑英華卷八九二
杜濟墓誌	萬年縣洪原鄉之少陵原	大曆一·七七六	顏魯公文集(四部叢刊本)卷八·一〇 續陝西通志稿卷一四八
辛秘神道碑	萬年縣洪原鄉之少陵原	元和一五·八二〇	文苑英華卷九一五
岐陽公主墓誌	萬年縣洪原鄉少陵原	開成二·八三七	「卷九六八
杜顛墓誌	萬年縣洪原鄉少陵西南二里牧	大中六·八五二	「卷九五八
裴希先神道碑	長安少陵原	貞觀七·六三三	「卷九二四
韋元誠墓誌	少陵原	永泰二·七六六	「卷九五六
徐府君神道碑	「	上元三·六七六	「卷八九四
蕭公神道碑	「	長壽二·六九三	「卷八九五
楊志誠神道碑	「	景龍二·七〇八	「卷九二六
韋抗神道碑	京城東南少陵原	開元一四·七二六	「卷八九六
徐文賢神道碑	萬年縣之少陵原	開元一七·七二九	「卷八九三
路太一神道碑	京兆府萬年縣少陵原	開元三三·七三五	「卷九三〇
郭敬之神道碑	京兆少陵原	天寶一三·七五四	「卷九三〇

楊靈前墓誌	少陵原	廣德一・七六三	文苑英華卷九五九
張司空夫人谷氏神道碑	京師少陵原	貞元一・七九五	卷九三四・九六七
府君墓誌版文諱集	萬年縣之少陵原	貞元二・七九六	卷九四四
趙郡夫人李氏墓誌	萬年縣少陵原實栖鳳原	貞元一六・八〇〇	卷九六八
田承嗣神道碑	少陵原	大中六・八五二	卷九一五
姚貞公神道碑	少陵原黃渠里	不詳	卷八九五
閑用之墓誌	少陵原	不詳	卷九四九
韓洄行狀	京兆府萬年縣芙蓉鄉龍遊里	貞元一三・七九七	權載之文集卷二〇 文苑英華卷九七三
徐申行狀	京兆府萬年縣青蓋鄉交原里	元和一・八〇六	李文公集卷一一 文苑英華卷九七六
吳氏女奈波羅碑墓誌	雍州明堂縣進賢鄉	儀鳳三・六七八	「武氏論文」一九五六年西安東郊韓森寨出土
穎川太夫人陳氏神道碑	萬年縣龍首鄉神鹿里	開元九・七二一	張說之文集卷二一 文苑英華卷九三四
王公夫人李氏墓誌	萬年縣龍首鄉成義里鳳栖原	太和六・八三三	八瓊室卷七二「武氏論文」曲江池南的高地
杜行方墓誌	萬年縣龍首鄉龍首原	太和六・八三二	金石續編卷一〇 古誌石華卷一八「武氏論文」
韋公夫人裴氏墓誌	萬年縣御宿川大章曲	景龍三・七〇九	「武氏論文」
真空寺尼韋提墓誌	萬年縣禦宿鄉	不詳	「
梁羅墓誌	京兆郡山北鄉樊川之岡	大業四・六〇八	「
王侍郎太夫人權氏墓誌	山北之里神禾之原	貞元二一？・八〇五	文苑英華卷九六八
裴倩墓誌	萬年縣神禾原	大曆七？・七七二	卷八九五
裴紹業墓誌	萬年縣白鹿鄉	長安三・七〇三	「武氏論文」一九五四年西安東郊韓森寨出土
劉奇秀夫人駱氏墓誌	萬年縣雲門鄉	元和三・八〇八	「武氏論文」
白居易撰永穆公主墓誌(?)	萬年縣上好鄉洪平原	不詳	長安志卷一一 萬年縣條畢沉注
德宗賢妃韋氏墓誌	萬年縣上好里洪平原	元和四・八〇九	白氏長慶集卷二五 文苑英華卷九六八
任佶墓誌	萬年柳(楊?)村	元和一四・八一九	文苑英華卷九五七
薛舒神道碑	萬年縣栖鳳原	大曆一一・七七六	卷九二四
崔汪墓誌	萬年縣棲鳳原	大曆四・七六九	卷九五六
亡妻楊氏墓誌	萬年縣栖鳳原	貞元一五？・七九九	卷九六八
河東縣太君盧氏墓誌	京兆萬年栖鳳原	元和二・八〇七	卷九六九

梁守謙墓誌	萬年縣李姚村白鹿原	太和一·八二七	續陝西通志稿卷一五一
程修己墓誌	京兆府萬年縣姜尹村	咸通四·八六三	金石續編一一 八瓊室卷七六
楊壽女母王氏墓誌	萬年裔村庫谷	咸通五·八六四	古誌石華卷二一
李君夫人楊氏墓誌	京兆府萬年縣小陽村	咸通一四·八七三	“ 卷二二
伊慎神道碑	萬年縣某原	元和六·八一	文苑英華卷九〇一
李孟犂神道碑	京兆萬年縣之畢原	大曆一·七六六	“ 卷九二二
美公神道碑	萬年縣之某原	貞元一五·七八七	“ 卷八九七
劉世通墓誌	雍州長安縣龍首鄉興壹里	永徽一·六五〇	「武氏論文」一九五五年西安西郊小土門村出土
威德墓誌	長安縣龍首鄉	開元九·七二一	文苑英華卷九四九
折君夫人曹氏墓誌	金光坊龍首原	開元一一·七二三	金石續編卷六
夫人袁氏墓誌	長安縣龍首鄉龍首原	聖曆二·六九九	“ 卷六
朱庭玘墓誌	京兆府長安縣龍首鄉龍首里	元和三·八〇八	「武氏論文」一九五五年西安西郊土門村附近出土
劉繼墓誌	縣西龍首鄉未央里邢村白帝檀	大中二·八四八	匱齋卷三三
劉仕侑墓誌	長安縣龍首鄉邢村	咸通七·八六六	金石續編卷一一 八瓊室卷七六
西門珍墓誌	長安縣龍首原西距阿城東建榮城承平鄉	元和一二·八一七	“ 卷一〇 “ 卷七〇
邵才志墓誌	長安縣承平鄉史劉村	元和一四·八一九	八瓊室卷七〇
朱府君夫人趙氏墓誌	長安縣承平鄉大嚴村	太和八·八三四	“ 卷七二
陳士棟墓誌	“	開成五·八四〇	古誌石華續編卷二一
李柳夫人宇文氏墓誌	長安縣承平鄉龍首原南劉村	咸通八·八六七	八瓊室卷七六 匱齋卷三四
荆從皋墓誌	長安縣承平鄉小劉村	咸通一一·八七〇	「武氏論文」一九五五年今西關外飛機場附近出土
茹義忠神道碑	京兆府長安縣永平鄉阿房殿之墟	天寶七·七四八	文苑英華卷九〇九
賀從章墓誌	長安縣永平鄉盛安里	開成九?	「武氏論文」一九五五年(阿房宮)遺址東南賀家村出土
韋公神道碑	長安縣龍首原	乾元二·七五九	文苑英華卷九三一
韋瓊墓誌	長安縣永壽鄉畢原	天寶一四·七五五	關中金石文字存逸考卷一 八瓊室卷五八
和川陳氏墓誌	長安縣永壽鄉高陽原	大中四·八五〇	八瓊室卷七五
崔君夫人獨孤氏墓誌	長安縣義陽鄉義陽原	天寶二·七四三	匱齋卷一四
楊君夫人趙氏墓誌	長安縣昆明鄉魏村	元和一四·八一九	“ 卷三〇

索 思 禮 墓 誌	京兆龍門鄉	天寶三·七四四	匄齋卷二四
劉智及夫人合祔墓誌	京兆府長安縣國城門西七里龍首原龍門鄉懷道里	天寶一五·七五六	關中金石文字存逸考卷四「武氏論文」
朱君及夫人趙氏合祔墓誌	長安縣龍門鄉石井村	元和七·八一二	八瓊室卷七二
沙陀公夫人阿史那氏墓誌	長安縣居德鄉龍首原	開元八·七二〇	關中金石文字存逸考卷三 唐文拾遺卷六五
安 附 國 神 道 碑	長安縣孝悌鄉	永隆二·六八一	文苑英華卷九二〇
王緒太夫人郭氏墓誌	乾封縣萬春鄉杜永村	神功一·六九七	「武氏論文」
裴 續 墓 誌	長安縣萬春鄉神和原	開元二八·七四〇	金石萃編卷八四
威翼夫人趙氏墓版	雍州長安縣清化鄉	貞觀六·六三二	八瓊室卷三〇
王 祥 墓 誌	青槐鄉阿城原	上元二·六七五	續陝西通志稿卷一六五「武氏論文」
李 鎬 墓 誌	京兆長安縣龍泉鄉馬祖原	乾元一·七五八	「武氏論文」一九五五年西安西郊小土門村出土
李府君夫人王氏墓誌	京兆府長安縣居安鄉高陽之原	開元二·七一四	續陝西通志稿卷一四五「武氏論文」
于 申 墓 誌	城南長安縣居安鄉高陽原	貞元九·七九三	“ 卷一五〇
嚴 震 墓 誌	長安縣居安鄉	貞元一六·八〇〇	權載之文集卷二一「武氏論文」
馮昭泰神道碑	長安縣高陽原	開元一八·七三〇	文苑英華卷九二一
董 公 神 道 碑	長安高陽原	永貞一·八〇五	“ 卷八八七
韋虛心神道碑	京兆之高陽原	開元三〇·七四二	“ 卷九一八
陸 元 方 墓 誌	困門之南費村	大足一·七〇一	“ 卷九三六
梁 蕭	京師之南小趙村	貞元一〇·七九四	“ 卷九四四
柳氏孀女老師墓誌	杜城村	會昌五·八四五	八瓊室卷七四
皇甫弘敬墓誌	龍首原隆安里	顯慶四·六五九	匄齋卷一七
魯 謙 墓 誌	長安縣德義里胡趙村	大中一一·八五七	續裴西通志稿卷一六五
湯君夫人傷氏墓誌	長安縣敵村	永徽二·六五一	八瓊室卷三五
揚君夫人趙氏墓誌	金光門外小敵村	元和一四·六七三	匄齋卷三〇
石 忠 政 墓 誌	城西小敵村	長慶一·八一九	古誌石華續編卷二
趙君夫人張氏墓誌	京兆府長安縣小敵村	會昌三·八二二	古誌石華卷一九 八瓊室卷七三
劉德章室女墓誌	長安縣第五村	乾符二·八四五	八瓊室卷七七
楊發女子書墓誌	長安縣南原姜允村	乾符五·八四八	“ 卷七七

裴府君夫人柳氏墓誌	長安縣之神禾原	貞元一六・八〇〇	文苑英華卷九六八
崔公神道碑	(續)長安南杜陵原	天寶二一・七五三	卷九〇〇
裴行儉神道碑	終南山	開元五・七一七	卷八八三
裴冕神道碑	京城南畢原	大曆五・七七〇	卷八八五

本表は愛后元氏「唐代西京鄉里村考」東洋史研究第四〇卷三〇号 一九八一の付表をもとに、若干の例を加除して作成した。郷名の配列は、愛后氏に従い、一部を改めた。※は葬送年を示す。送葬地欄( )は筆者の補筆である。本表の漢字は印刷の都合上、簡体字に改めたところがある。

武伯綸氏「唐万年、長安縣鄉里考」によると解放前後出土した墓誌のうち、郷名を記したものは、万年縣澧川郷が四十方之多、同長樂郷が三十方左右、同崇道郷が二十方左右、同義豊郷が六七方、同龍首郷が十六七方。また長安縣龍首郷・原と記すものが新旧合わせて約三十三方とある。



く連なる山嶺の総称であるようで、「洛城之北邙嶺之陰十五里千金郷之地」（貞観二二年、張行滿墓誌）とか、「河南平衆郷芒山之陽習村」（龍朔二、索玄墓誌）のように、邙山を冠した郷名は多く、河南県上ハ、洛陽県四におよぶ。「文苑英華」には、郷名不詳ながら、邙山を記した墓誌をなお数例見出す。また、邙山を冠さずとも、「東都西北十里零（靈）淵郷」（大業九、張愛及夫人李氏合耐墓誌）のように、洛陽北方の郷名を記した墓誌は少なくない。ところで、邙山周辺では解放初期にも相当数の墓誌が出土したというが、唐代の墳墓は、黄展岳氏によると、解放前に徹底的に破壊され、解放後の発見は比較的少ない<sup>(98)</sup>という。

このほか、洛陽城の東郊に比定される上東郷・伊洛郷、東南に比定される伊水郷、龍門郷とともに南郊に比定される伊泆郷の名を記した墓誌・神道碑文もあるが、その数は多くないようである。こうした点を勘案すると、洛陽では、北方の邙山一帯および南郊の関林が主要な葬地であったようである。和田 萃氏が洛陽南郊の龍門に葬地を求めたこと<sup>(99)</sup>の適否はまだ判断できないが、南郊に葬地を求めた見通しは誤ってはいないようである。

以上、唐代の長安と洛陽の葬地を概観した。両都における唐代墳墓の分布を、京城との関係で要約してみると、長安城では宮城の北に接した部分を除き、京城の周囲すべてに墳墓が営まれているし、洛陽城でも西から西南の地域を除き、数は少ないがやはり京城の周囲に墳墓

が営まれている。ここで、方位として重視されたのは「北」であった。それは長安における皇帝陵の分布によっても明らかであろう。洛陽でも邙山が大葬地であった。ただし、この場合の「北」は厳密に真北を指すのではなく、宮を中心に莫然とした方向を示すにすぎない。その他の方向については、長安が東から東南および西、洛陽では南に濃い分布を示している。ただし、小稿がもとにした材料からは、長安と洛陽で葬地の選定に本質的な違いがあったかどうかまで検討することはできなかった。

## 五 まとめ

これまで、平城京の葬地とこれに関連の深い藤原京、および唐長安と洛陽の葬地を概観してきた。その要旨を改めて示すと

(一) 八世紀の奈良盆地の墳墓は、盆地周辺の丘陵地帯および大和高原に多くが分布し、少数が平野部の低丘陵と河川敷きにある。文献史料と墓誌および遺構などを手懸りにすると、平城京の葬地は京の北方、東方（田原里および都称盆地）、西方（生駒山東麓）の丘陵地帯、および京南辺の河川敷きである

(二) このうち重要な地域は、四天皇および皇后・皇太后をはじめ高位高官の葬地あるいは火葬地であった京北方の葬地である。この葬地は、地形の上から平城宮北側の空白地帯を挟んでさらに東群と西群に分け

ることができる

③ 平城京周辺の葬地は、現大和郡山市稗田町付近の奈良時代の河原だが、この推定が正しければ、ほぼ似た位置にある平安京紀伊郡の葬地—いわゆる佐比河原の先蹤とみることができ

④ 藤原京の葬地は従来より指摘されてきた京南西古墳群の他に、東方の初瀬谷沿いの丘陵地帯、京西辺の丘陵地帯、西方の葛城山東麓にも推定する

⑤ 近年、平城京の直接の原型は藤原京であるとする見解が一般化しつつある。葬地の分布でも類似点が認められるが、天皇陵のあり方に関しては異なる

⑥ 当時の日本が多くの範を求めた唐代の長安では、宮城の北に接する地に、洛陽では宮城の西から西南に接する地に墳墓の空白地帯があったが、基本的には京城の周囲すべてに墳墓が営まれたようである。尚都で方位として重視されたのは「北」で、長安では皇帝陵が渭水の北方にあるし、洛陽では邙山一帯が葬地であった。その他の方向では、長安では東から東南、および西が重視され、洛陽では南が重視されたようである

⑦ 平城京における天皇陵の分布は、⑤にみたように藤原京に直接の系譜を求めることは難しい。天皇陵が京の北方にあることは、長安や洛陽で北方に大葬地があることと関連があるのではなからうか。ことに、長安で皇帝陵が渭水の北に集中すること、京城の東から東南お

よび西に大葬地があることは示唆的である。平城京の葬地は長安におけるそれを模倣しているのではなからうか。ただし、皇帝陵の規模や京城との空間的距離は彼我比較にならない差異が存し、墓制も同様に差があるので、長安の葬地のあり方を模倣したとしても平城京の実情に則した選択と変形が行われたのではなからうか

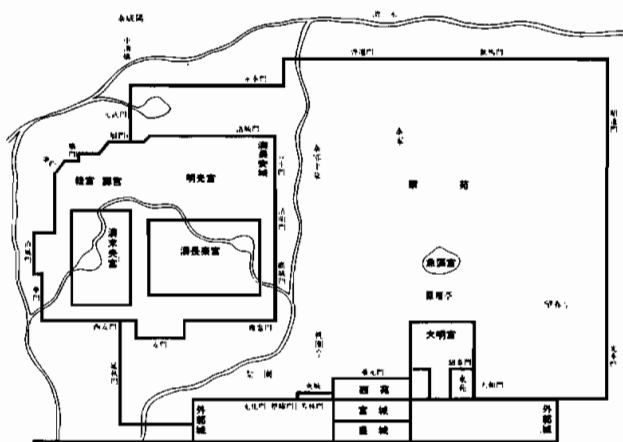
以上、七項目に分けて要約してきた。平城京の葬地が、唐長安の葬地の影響を受けていたとする推定に誤りがないとすると、次に新たな問題が派生してくる。すでに述べたが、平城京の北は木津川に至る間が墳墓の空白地帯となっている。規模こそ違うが、長安城も北の渭水に至る間が、洛陽では宮城の西から西南が同様に空白地帯となっている。なぜこの地域に墳墓がないのであろうか。中国ではそこに禁苑があったためであろう。長安城は「唐兩京条坊攻」巻一に「禁苑者：東距澆北枕渭西包漢長安城南接都城東西二十七里（旧唐書は三十里に作る）、南北二十三里、周一百二十里」とある。洛陽城は「旧唐書」地理志東都条に「禁苑在都城之西、東抵宮城西臨九曲北背邙南距飛仙、苑城東面十七里、南面三十九里、西面五十里、北面二十里」とあって「周一百二十六里」を数え、「垣高一丈九尺」（『唐兩京条坊攻』巻二）であった。禁苑は天子の苑地であって、その意味は時代によって変化があった。有名な漢の上林園は、漢帝国の版図拡大に伴い、水陸戦の軍事訓練の場として重要であった。唐代には軍事的側面は薄れ、皇帝の蔬果や鳥禽をとるところとして、また、狩猟や饗宴を行う場所

として機能し、その為の施設も苑内に多く設けられたようである。<sup>(10)</sup> 禁苑は宮城と同じ意識であり、墳墓がいとなめなかつたのであろう。

平城宮では、数年前宮の北側に築地塀で区画された「松林苑」が発見された。その規模は南北一杆以上、東西〇・五杆で、外郭内部も築地塀で区画していたようである。<sup>(102)</sup> 平城宮北方の墳墓の空白地帯は、この「松林苑」によって説明することも可能である。しかし、墳墓の空白地帯は「松林苑」よりも遥かに大きい。また、現「松林苑」推定地は、奈良山丘陵の一支丘上に大半の痕跡がある。園池は日本の宮の中では重要な位置をしめているが、平城宮・京跡発見の園池は大半が谷筋に当る沖積面を利用したもので、丘陵上の園池は古墳の濠を利用したもののしか知られていない。この推定地東側の谷筋には、磐之媛陵古墳と平城宮北面大垣との間に広大な水上池がある。この池は、宮北面大垣の存在や、平城宮東大溝S D二七〇〇の水源となつていことから、奈良時代に築かれたことが確実である。池の北岸からは中島が池中に張り出しており、布目瓦も散布している。未調査のため精細は不詳だが、状況からみて、亭があつた可能性もある。中島の西側には「中島」の字名も残る。<sup>(104)</sup> 水上池の東岸は現在浸食されているが、平城宮東院の外郭線とほぼ一致しており、これに合わせて築かれたのであろう。河上邦彦氏は最近「松林苑」の範囲を東に拡張、水上池を含む案を発表されたが、水上池は「松林苑」とは別の苑池の一部でもよいと考える。長安では宮の北に、大明宮東南隅の東内苑、宮城北の西内苑、

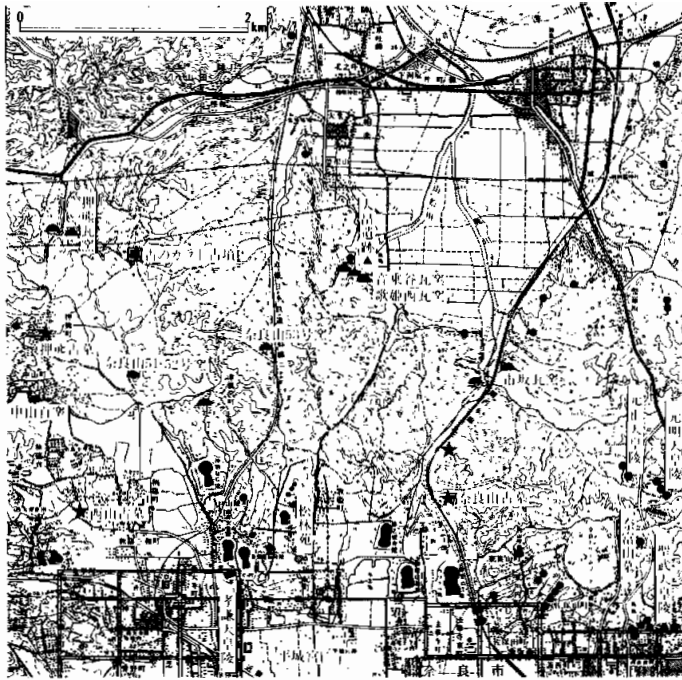
それに、ここで問題にしている禁苑の西京三苑があつた(図三)。三苑の関係は、東内苑、西内苑を禁苑が包みこむ二重構造となつている。「松林苑」は位置からみて、長安城の西内苑にあたるものである。<sup>(106)</sup> 東内苑にあたる苑地を平城宮に求め得るか否かはなお問題だが、水上池周辺は「松林苑」北側をも含めた禁苑の一部とすることも不可能ではあるまい。

次に、平城宮北方に想定する禁苑の範囲をみておこう。墳墓の分布



第三図 西京三苑図

徐松「唐西京坊笈」(平岡武夫『唐代の長安と洛陽』による)  
長安城の北には、西内苑、東内苑と、これらを含みこむ形で広がる東西27里(約14.3 km)、南北23里(約12.2 km)、周120里(63.5 km)の禁苑があつた。禁苑には多くの園池、亭、宮殿等があつた。



第四図 平城宮北方の遺跡分布

国土地理院1971年作成 1/25,000 「奈良」を使用  
 「元正天皇陵」と奈良山53号窯を結ぶ線の北側丘陵は、  
 平城ニュータウンおよび民間の住宅地として開発され、  
 現況は本図と著るしく異なる。

○ 古墳    ☆ 古窯  
 △ 瓦窯    △ その他遺跡

と地形からみて、南は宮に接し、東は現在関西線、二四号バイパスの  
 通る谷、西は京北条里の地、北は木津川に至る地域である。木津川に  
 面しては、大安寺や薬師寺の木屋所があったから、<sup>(107)</sup> 実際には、木津川  
 のかなり南側が北限ではないか。また、宮の西北三・五軒には石の力

ラト古墳があるので、ここも含まれないのであろう。この様にみると、  
 地形に沿うのではなく、上に述べた範囲内で平安京の禁野<sup>(108)</sup>のような長  
 方形の範囲を考へるべきかも知れない。

このように、平城宮北方に禁苑を想定したが、その証明には重大な  
 障害がいくつかある。列挙すると、禁苑の区画が見得であること、文  
 献に禁苑が見えないこと、<sup>(109)</sup> 禁苑想定地内に平城宮の官瓦窯が点在する  
 こと、禁苑設定の時期をいつに考へるか、などである。区画や文献の問  
 題は暫くおとして、瓦窯の問題について一応の検討を試みておこう。

中国の場合、唐の長安や洛陽では都城の建設に要した瓦を生産する  
 ために、各地に瓦窯が<sup>(111)</sup> 営まれた。ただしその報告例が少なく、ここで  
 問題となる禁苑にまで瓦窯が<sup>(112)</sup> 営まれたかどうか明らかでない。しかし、  
 外郭城内どころか皇城や宮城内においてさえ瓦窯があった。長安城で  
 は、西北の坊に当る普寧坊からは三四基の瓦窯が発見された。<sup>(113)</sup> 洛陽城  
 では外郭城の北に接した「北窯」が数百基にのぼる大瓦窯地帯と推定  
 されており、宮城・皇城内各一カ所からも瓦窯が発見されている。<sup>(114)</sup> ま  
 た、外郭城西面の閭闔門の西に接して七基の瓦窯がある。<sup>(115)</sup> この地は先  
 に引いた『旧唐書』などの記述では禁苑に含まれる。ただ、以上の瓦  
 窯は唐代とはされるが、唐代のいかなる時点のものかには、報告者は  
 一切触れず、玄宗皇帝の開元一九(七三二)年の勅「京洛兩都是惟帝  
 宅街衢坊市固須修築城内不得穿掘為燒造磚、其有公私修造、不得于街  
 巷穿坑取土」(『唐会要』卷八十六街巷条)を根拠に、この禁令以前

としている。こうした禁令が出されたこと自体、禁苑や城内に瓦窯を営むことが珍らしくなかったと想像できるのだが、報告例の少ない現在、そこまで立ち入ることはできない。ここではこうした事実を指摘するにとどめよう。平城宮において、禁苑の存在を論証するには以上の問題の他にも多くの問題があるが、それらは小稿で論じつくすことができない。小稿では、平城京葬地の内容とその分析から生じた新たな問題を提示するにとどめ、後考を待つことにしたい。

一九八三・三・六稿

一九八四・一・一六補

## 註

(1) 『令集解』巻四十に引く「古記」には大道とある。

(2) 坂本太郎氏校注『日本書紀』下(日本古典文学大系六十八) 一九六五 頁二九四

(3) 和田 萃「東アジアの古代都城と葬地」『古代国家の形成と展開』一九七六

同「喪葬令皇都条についての覚書」青陵二四号 一九七四 和田

氏は、「其諾楽京葛木居寺前南墓原と引用し論を進められている。

後述の如く河川敷が葬地として利用されたことは贅意を表したい。

しかし、和田氏自身認められる様に、諸本には墓(藪)原に作るもの(日本古典文学大系七〇 頁二四五)があり、なお検討が必要であろう。なお、福山敏男『奈良朝寺院の研究』一九四八 所収「服寺と藤原堂」参照

(4) 岸 俊男「万葉集からみた新しい遺物・遺跡」『日本古代の国家と宗教』上巻 一九八〇 頁六一―一〇〇 同「大安万侶の墓と田原里」『太安朝臣安万侶とその墓』『遺跡・遺物と古代史学』一九八〇 所収

(5) 『續日本後紀』承和九年七月丁未条

(6) 『平安遺文』Ⅱ―四四七頁 三〇五文書天禄三年五月三日初記 良源遺告

(7) 小島俊治『奈良県の考古学』一九六五 頁三七―三七二

(8) 黒崎 直『近畿における八―九世紀の墳墓』『奈良国立文化財研究所研究論集』VI 一九八〇 所収、特に頁一九―二二

(9) 同様の観点は、前園実知雄氏も指摘されている。前園実知雄「まとめ」『太安萬侶墓』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四十三冊) 一九八一 所収、頁一七八

(10) 堀池春峰「佐井寺僧道業墓誌について」『日本歴史第一五三号』一九六一 頁二一十七

(11) 「朕崩之後、宜於大和国添上郡藏寶山雍良岑造電火葬」『續日本紀』以下「統紀」と略す 養老五年十二月十三日条

- (12) 「火葬太上天皇於佐保山陵」『統紀』天平二十(七四八)年四月二十一日条  
「改葬於奈保山陵」『統紀』天平勝宝二(七五〇)年十月十八日条
- (13) 「奉葬太上天皇於佐保山陵」『統紀』天平勝宝八(七五六)年四月十九日条
- (14) 「葬仁正皇太后於大和国添上郡佐保山」『統紀』天平宝字四(七六〇)年六月七日条
- (15) 「火葬於佐保山陵」『統紀』天平勝宝六(七五四)年八月四日条
- (16) 「公卿補任」元正天皇養老四年条に、「火葬佐保山推山岡、從遺教也」とある。
- (17) 『家伝下』に「火葬于佐保山、禮也」とある。『寧楽遺文』下頁八八六
- (18) 『統紀』宝龜八(七七七)年五月二十八日条「伊勢国飯高郡人也…葬奈保山」
- (19) 『万葉集』卷三―四七四「昔こそ外にも見しか吾妹子が奥つ城と思へば愛しき佐保(寶)山」とある。
- (20) 『万葉集』卷十七―三九五七に「佐保山火葬」とある。
- (21) 『統紀』神龜五(七二八)年九月十九日条「葬於那富山<sup>ナト</sup>時年二」とある。

- (22) 平城宮と佐保山の葬地との間には、ウワナベ・コナベ古墳がある。両古墳とも平城京の造宮にも破壊されず、逆に。ウワナベ古墳の場合は、条坊を南につらせている。両古墳は平城宮の東北にあたることから、佐保山の葬地を含め、裏鬼門に対する守護の意味があったのでなからうか。
- (23) 平城宮跡発掘調査部「奈良山出土の感骨器と墨」奈良国立文化財研究所年報一九七七 頁四十五 なお、註30に述べるように墨の存在から胞衣壺の可能性もあり得る。
- (24) ウワナベ古墳の陪冢四号付近から感骨器が出土したとされるが、本例は報告者の未永雅雄氏自氏が火葬骨壺か否か不明とされている。「奈良市法華寺町宇和奈辺古墳群大和第三第四第五第六号古墳調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第四 一九四九 頁六
- (25) 奈良国立文化財研究所「奈良山Ⅲ―平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」一九七九 頁十二
- (26) 森本六爾「大和生駒郡押熊出土の骨壺」考古学雑誌第十四巻八号 一九二四 頁四九四―四九八、なお、本例を含め以下の土器の年代については西 弘海氏の御教示を得た。
- (27) 小島俊治「大和出土の二例の骨壺」古代学研究第十五・十六号 一九五六 頁六十三
- (28) 奈良市史編集審議会『奈良市史考古篇』一九六八 頁一二五―

一二六 高野山陵は長く所在不明となっていたものを『山陵考』が現治定地に比定。文久三年十一月修補、翌四年竣功したという『山陵』一九二五 頁一一八

近年、平城宮と北辺の「松林苑」との間に大蔵省倉庫群が占地したとする説(岸 俊男「松林苑と年中行事」『遺跡遺物と古代史学』一九八〇 所収)がある。この「大蔵省」推定地から秋篠川(西堀河)にかけて、運河とそれに連なる道路と考える痕跡がある。現「高野山陵」西南部の濠と外堤は、この地割と一部重複する(奈良国立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』一九八一 頁四一五)。将来この地割の調査が実施されれば、これらの関係が明確になるであろう。

(29) 奈良国立文化財研究所『平城宮右京五条四坊三坪発掘調査概報』一九七七 頁十二

(30) 水野正好・町田 章阿氏の御教示によると「玉薬」承元三(一一二〇)年五月二十五日条に、白瓷瓶子に銭五文、筆一管を袍衣とともに入れることが見える。『御産所日記』永享六(一一三四)年二月九日条に、銭三十三文、筆一管墨一丁を袍衣とともに壺に入れることが見える。近世の袍衣処理の習俗に、男子は官吏としての立身を希って墨と筆を、女子は良妻賢母を希って縫針を袍衣壺におさめる地方があるという。

(31) 小島俊治『奈良県の考古学』前掲 頁三三五

(32) 県立橿原考古学研究所編『太安萬侶墓』前掲 頁四〇―四八

(33) 前掲書 頁六

(34) 『延喜式』諸陵寮に「田原西陵 春日宮御宇天皇、在大和国添上郡 兆城東西九町南北九町守戸五烟」とある。

(35) 『統紀』延暦元(七八二)年正月六日条、および同五(七八六)年十月二十八日条

(36) 岸 俊男「万葉集からみた新しい遺物・遺跡」『前掲書』頁八十九

(37) 前掲書 頁八十九

(38) 角田文衛「都市文化の波及」『奈良県総合文化調査報告書―都介野地区』一九五二によると安萬侶墓は次の特徴がある。㊶南向の傾斜地に一辺約十二尺の方形墓壇を掘る。墓壇底はほぼ水平。

㊷墓壇底面には玉石を一重に、粗く敷く。㊸墓壇周囲に炭化物をまじえた黒色土を積む。㊹壇内は緻密良質の粘土(厚三〜六糎)と木炭・灰を交互に積み、固く叩き締める。これは地下部分だけでなく、地上は円丘状に盛り上げる。㊺地上に盛り上げた粘土盤上にさらに粘土が半球状に突き固められ、その内部に骨櫃と墓誌がおさめられた。㊻骨櫃の精確な位置は不詳だが、墓壇中央より北に偏っていた。以上の報告のうち、㊶㊷㊸は版築工法を示す。㊹の掘込底面に玉石を粗く敷くことも、やはり同時代の基礎建築の掘込地業の基底部によく見る工法である。従って、㊶の掘込は墓

墳ではなく、掘込地業の掘形にあたるものであろう。以上から安萬侶墓は、掘込地業を行い、墳丘を版築した火葬墓と考える。

(39) 天理大学附属天理参考館分室編『奈良県天理市柚之内火葬墓』

(考古学調査研究中間報告七号) 一九八三

(40) 角田文衛「都市文化の波及」と『前掲書』頁四二九

(41) 『都介野村史』一九五六 頁二十四註四

(42) 小島俊治「天理市福住町鈴原出土骨壺」『奈良県文化財調査報告』第七集一九六四、頁十四―十五

(43) 『都介野村史』前掲 頁二十四註五

(44) 中村春寿「鹿苑並飛火野の祭祀遺跡」『春日大社古代祭祀遺跡調査報告』一九八一 頁九

(45) 末永雅雄・尾崎彦仁男「春日山古墓の調査」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第三号 一九五四 頁一―二十、特に二十

(46) 中村春寿「鹿苑付近の祭祀遺跡の調査」『前掲書』頁十六―十七

七

(47) 墓誌は、この童王塚の地下〇・六米から明治五(一八七二)年発見。伴出遺物、墓の構造は不詳。墓の周辺は現在大幅に地下げされ、住宅街となって墓のみが独立丘のようにそびえている。

なお、一九八四年一月に橿原考古学研究所が再調査した。

(48) 若林勝邦「美努岡万連墓誌の発見」『考古界』第二卷九号 一九〇

三 頁五三二―五三四

(49) 奈良国立文化財研究所『日本古代の墓誌』一九七七 頁九十

(50) 同上書 頁九十一―九十二、内務省「行基墓」『奈良県における指定史蹟』一

(51) 中井一夫「稗田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九七七年度 所収 図版一、奈良時代川路の推定復原図

(52) 同上書 頁七十五

(53) 『日本三代実録』卷二十 貞観十三年閏八月二十八日条

(54) 須磨千頼「山城国紀伊郡の条里について」『史学雑誌』第六十五編四号 一九五二 頁六十七―七十五

(55) 「賽河原」『望月仏教大辞典』一九五五 増訂版 頁一四二三

(56) ちなみに、稗田遺跡から北西約〇・八キロメートル、西二坊大路の南延長線上にあたる現大和郡山市天井町には、「戈六」「細道」の字名がある。「戈六」は添下郡京南三条二里六坪に、「細道」は同十七坪にあたる(橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』No. 33

(57) 喜田貞吉博士は、「西大寺蔵平城京北班田図」をもとに、平城京西二坊大路を佐紀大路・佐伊大路と呼び、平安京佐比大路の名称は平城京のそれを移したかと推定している。「本邦都城の制」

『喜田貞吉全集』第五冊所収 頁三〇五―三〇六

(58) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河―左京九条三坊の調査』

一九八三 頁三十二 廃都後の投棄の可能性もある。



- (59) 『統紀』神護景雲三(七六九)年五月十九日条
- (60) 堀井堪一郎・伊達宗泰「平城京城内河川の歴史的変遷に関する研究」『平城京の復原保存計画に関する調査研究』一九七二 所収  
ここでは、佐保川が外京を流れた可能性を指摘されている。
- (61) 岸 俊男「京域の想定と藤原京条坊制」『藤原宮』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第二十五冊)一九六九 所収 頁一二四註五
- (62) 秋山日出雄・網干善教『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』一九七五
- (63) 網干善教・猪熊兼勝・菅谷文則『真弓マルコ山古墳』一九七八
- (64) 網干善教『史跡牽牛塚古墳―環境整備事業における事前調査報告』一九七七
- (65) 『万葉集』卷二―一九四・一九五に川島皇子を越智野に葬る時の歌とある。皇子の没年は日本紀を引き、朱鳥五(六九一)年とある。
- (66) 泉森 皎「文祢麻呂墓推定地」『大和を掘る―一九八一年度発掘調査速報展』一九八二 頁二十一―二十一
- (67) 帝室博物館『天平地宝』一九三七 頁二十八及び図版二十一、二十四。年代については西 弘海氏の御教示を得た。
- (68) 柿本人麿は生没年不詳だが、大和においては浄御原宮・藤原宮が活躍の舞台で、八世紀初頭には世を去ったと推定されている(久松潜一「柿本人麿の作品」 武田祐吉「柿本人麿評伝」『萬葉集大成・作家研究篇』上) 所収
- (69) 猪熊兼勝「飛鳥墓室の系譜」『奈良国立文化財研究所研究論集』Ⅲ 一九六七 所収 頁五十四
- (70) 藤井利章「橿原市久米ジガミ子遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九八〇年度 頁三二九―三三三
- (71) 水木要太郎「威奈大村墓」『奈良県史蹟勝地調査会報告』第一回 頁二十一―二十二
- (72) 網干善教「北葛城郡香芝町穴虫火葬墓」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十二輯 一九五九
- (73) 島田 暁「北葛城郡当麻村大字加守・金銅骨壺出土地」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第九輯 一九五六 頁四十五―四十九
- (74) 白石太一郎「馬見丘陵における古墳の分布」『馬見丘陵における古墳の調査』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第二十九冊) 一九七四 所収 頁十四
- (75) 最近では、同様の観方をとる説がふえている。例えば岡野慶隆「奈良時代における氏墓の成立と実態」古代研究十六号 一九七九 及び註9参照
- (76) 賀梓城「関中唐十八陵調査記」文物資料叢刊三号 一九八一 頁一三九―一五三

(77) 同上 及び、陝西省文物管理委員会「建国以来陝西省文物考古的收穫」『文物考古工作三十年』（日本語訳『中国考古学三十年』）所収 頁一三四

(78) 賀梓城『前掲書』 頁一五一付表四

(79) 同上書 頁一四五

(80) 陝西省考古研究所「唐順陵勘查記」文物一九六四年一号 頁三十四—三十九

(81) 陝西省社会科学院考古研究所「陝西咸陽唐蘇君墓発掘」考古一九六三年九号 頁四九三—四九八・四八五

(82) 註(77)に同じ。なお中国社会科学院考古研究所西安研究室が発掘報告した隋唐墓が約一七五基あり、両者を合わせると二一七五基となる。この様に、唐代の墓が多い理由は、人口が多かったことが原因であろう。それとともに以下の湯浅幸孫教授の指摘も見逃せない。

湯浅教授によると、「漢から隋唐の交までは退官した官吏は皆な本籍地に帰り、任地で卒したのも祖墳に葬られるのが通例であるが、唐宋の士大夫は任官して任地で卒すると、そこで葬り、終身その郷に帰らず、子孫はその地に寄寓することが多い。しかし明初に廻避の法が興り、又科擧の籍が固定したため退官した官吏は皆な本籍地に帰るようになり唐宋以来の士大夫流寓の風は漸く止むに至った」同教授「地券徵存考釋」中国史学史研究 第四

号 一九八一 所収 頁三三

(83) 武伯綸「唐万年・長安県郷里考」考古学報一九六三年二号

頁八十七—九十九 この論文は、武氏「唐長安郊区的研究」文史

第三号 一九六三・一〇 のうち、該当する部分を転載したもののという。

(84) 愛后 元「唐代兩京郷里村考」東洋史研究第四〇巻三〇号一九

八一 頁二十八—六十九 愛后氏が引用された書目の主要なものは以下である。文苑英華、関中金石文字存逸考、金石萃編、唐文

拾遺、統陝西通志稿、古誌石華、同統編、八瓊室金石補正、匄齋藏石記、金石彙目分編、呂和叔文集、嘉慶咸寧縣志、長安志。後

述の如く、長安と平城京の葬地を比較検討する為には、長安における墳墓は七世紀からせめて八世紀初頭程度に限定すべきであろう。小稿では資料の制約上、長安のそれは唐代全部を含んでいる。

(85) 愛后氏も述べておられるごとく、中国々内の詳細な地図は未公表で、地名が明らかでない上に、発掘報告でも発見地を图示することは稀である。ここでは愛后氏の業績を利用していただいた。

(86) 中国科学院考古研究所「西安郊区隋唐墓」（中国田野考古報告集考古学専刊丁種第十八号）一九六六 および、民国作成五万分之一地形図「西安」による。

(87) 同上書 頁九十一「旧唐書」巻五二によると、肅宗の章敬皇后呉氏は開元二八（七四〇）年没後、春明門外に葬られ、後に建陵に

附葬とある。

- (88) 民国作成五万分之一地形図「西安」による。
- (89) 註87所引文献。
- (90) 仁井田陞『唐令拾遺』一九三三 頁八四一
- (91) 曾亿丹「洛陽発現鄭開明二年墓」考古 一九七八年三号
- (92) 洛陽博物館「洛陽閔林59号墓」考古 一九七二年三号頁三十二—三十四 特に三十二
- (93) 李献奇「洛陽清理一座唐墓」文物一九六五年七号 頁五十五  
中国里は一里五七六米。従つて五里は二・八八キロメートル。
- (94) 洛陽市文物工作队「洛陽龍門唐安善夫婦墓」中原文物一九八二年三期 頁二十一—二十六・十四
- (95) 河南省文化局文物工作队「一九五五年洛陽瀾西区北朝及隋唐墓葬発掘報告」考古学報一九五九年二号 頁九十五—一〇七
- (96) 愛后 元氏が引用された書目は以下の通り、芒洛冢墓遺文、同続補、元氏長慶集、千唐誌齋藏石目錄、漢魏南北朝墓誌集釋 註(85)と重複する書目は略
- (97) 愛后 元氏は、洛陽の郷名比定が長安より遙かに困難であると述べておられる。たとえば「洛陽城内は、毓徳坊に治所を置く洛陽縣が洛水以北を、寛政坊に治所を置く河南縣が洛水以南を、それぞれ管轄するが、禁苑地区である西部を除き、郊区について両縣の管轄区分がはなはだ明確さを欠き、同名郷がしばしば両縣管

下に見え、この點においても長安郊区に比して位置比定における困難さを倍加した」「唐代兩京郷里村考」前掲書 頁四十五

- 愛后氏は、金谷郷を洛陽老城の東北に復原された。同氏が引用された洛陽十六工区七十六号唐墓出土の墓誌二例には「河南縣金谷郷濼水之：」「遷于河南府河南縣金谷郷之」とある。(河南省文化局文物工作队第二隊「洛陽十六工区七十六号唐墓清理簡報」文物參考資料一九五六年五号、頁四十一—四十四、特に四十四。この洛陽十六工区は、王与綱・趙国璧「洛陽十六工区清理唐墓二座」文物參考資料一九五六年十二月 頁七十七に「在洛陽老城西二十里瀾河南岸秦嶺北麓(編為十六工区)」とある。金谷郷は洛陽老城の西に復原すべきではなからうか。かく考えると、後述の洛陽城西の禁苑との關係が問題となる。
- (98) 黄展岳「中国西安洛陽漢唐陵的調查与発掘」考古一九八一年六号 頁五三一—五三八、特に五三六
- (99) 和田 萃「東アジアの古代都城と葬地」『前掲書』 頁三八九
- (100) 岡 大路「支那宮苑園林史攷」一九三八 頁三十九、九十四
- (101) たとえば、徐松『唐兩京条坊攷』卷一
- (102) 河上邦彦「松林苑の確認と調査」奈良県観光新聞二七七号 一九七九
- (103) 田中哲雄「平城京と宮の庭園遺跡」『平城宮北辺地域発掘調査報告書』一九八一 頁十七—十九

(104) この点はすでに関野 貞博士が指摘している。関野 貞『平城京及大内裏考』（東京帝国大学紀要工科第参冊）一九〇七 頁一五六―一五七

(105) 一九八三年七月七日、橿原考古学研究所における「禁苑研究会」での発言。

(106) 同様のことは岸 俊男氏が指摘されている。岸 俊男『日本の

古代宮都』（NHK大学講座）一九八一 頁二二六―二二七

(107) 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に「一泉木屋并園地二町 東大路 西薬師寺木屋 南白井一段許退於北大河之限」とある『大日本古文書』第二卷六五七

(108) 平安京の禁野は、福山敏男氏や高橋康夫氏によると、『政事要略』卷七十に

「可禁制宮城以北山野事」

東限園池司東大道 西限野寺東

四至 南限宮城以北 北限靈嚴寺

とあるものに該当し、高橋氏の復原案を地図上に計測すると、東西約一・二キロメートル、南北約四キロメートルの規模となる。

福山敏男「野寺の位置」『日本建築史研究』一九六八 所収 頁四一三―四一九。高橋康夫「平安京とその北郊について」『日本建築学会論文報告集』第三一五 一九八二 頁一六三―一七〇

(109) 『日本靈異記』中巻第四十話に、橘奈良磨の奴が諾葉山で鷹狩

をした折、狐の子を串刺しにし、後に報復を受けた話がある。禁苑の機能の一つが狩猟にあるとすれば、何らかの関連があるのではないか。

(110) 歌姬瓦窯や音如ヶ谷瓦窯など四カ所の瓦窯と工房跡などがある『奈良山―平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』I―III 一九七三・七四 一九七九

(111) 武伯綸編著『西安歴史述略』一九七九 第六章第五節（二二八

頁）には、西安郊区の東・西・南に南窯や北窯の村名がある。これは唐代に磚瓦・陶器を専門的に焼いていた村名であろうという。

(112) 唐金裕「西安市西郊唐代磚瓦窯跡」考古一九九一年九号 頁四九一―四九二

(113) 黄明蘭「隋唐東都洛陽城発現的幾処磚瓦窯群」文物資料叢刊一九七八年二号 頁一〇―一三、一一〇および一一三

(114) 同上書および、王愷「洛陽隋唐宮城内的焼瓦窯」考古一九七四年四号 頁二五七―二六二

(115) 黄明蘭『前掲書』頁一一〇

(116) 平安京の北郊には、多くの官瓦窯が知られている。そのうち、平安京創建時の瓦窯である鎮守庵瓦窯、角社東群瓦窯、角社西群瓦窯は、註(108)の禁野の範囲に含まれるようである。瓦窯については古代学協会『西賀茂瓦窯跡』（平安京跡研究調査報告第四号）一九七八

(117) 小稿で想定した禁苑に含まれる京都府相楽郡木津町大字大島では、堀立柱建物群や井戸などが発見されている。木津町教育委員会『大島遺跡第二次発掘調査』一九八三、こうした遺構の性格については、禁苑に伴う施設という観点も必要であろう。

なお、第五節の要旨の一部は、拙稿「平城宮―都城発掘史七」月刊文化財一九八三年八月号 頁三五―四二一 において述べた。

#### 追記

校正の段階で、平城京石京一条四坊八坪の「称徳天皇山荘」推定地にあたる西大寺竜王町から、平安初期の火葬墓が発見された。

また、杉山洋氏の教示によって、「松林苑」に含まれる奈良市歌姫町トビガミネ古墳の近辺で火葬蔵骨器が出土していることを知った。一九八〇年三月二二日付読売新聞。なお、この蔵骨器については藤井利章氏の御教示を得た。